

第1章 かしま 鹿島市の歴史的風致形成の背景

1 自然的環境

(1) 位置

本市は佐賀県の西南部に位置し、東方には有明海ありあけかいが広がり、南方には多良岳山系たらだけの山々が連なっている。東西に 11.5km、南北に 16.4km にわたり、市域面積は 112.12k m²を擁する。北は白石町しろいし、西は嬉野市うれしの、南東は太良町たら、南西は長崎県大村市おおむらに接している。



図：本市の位置

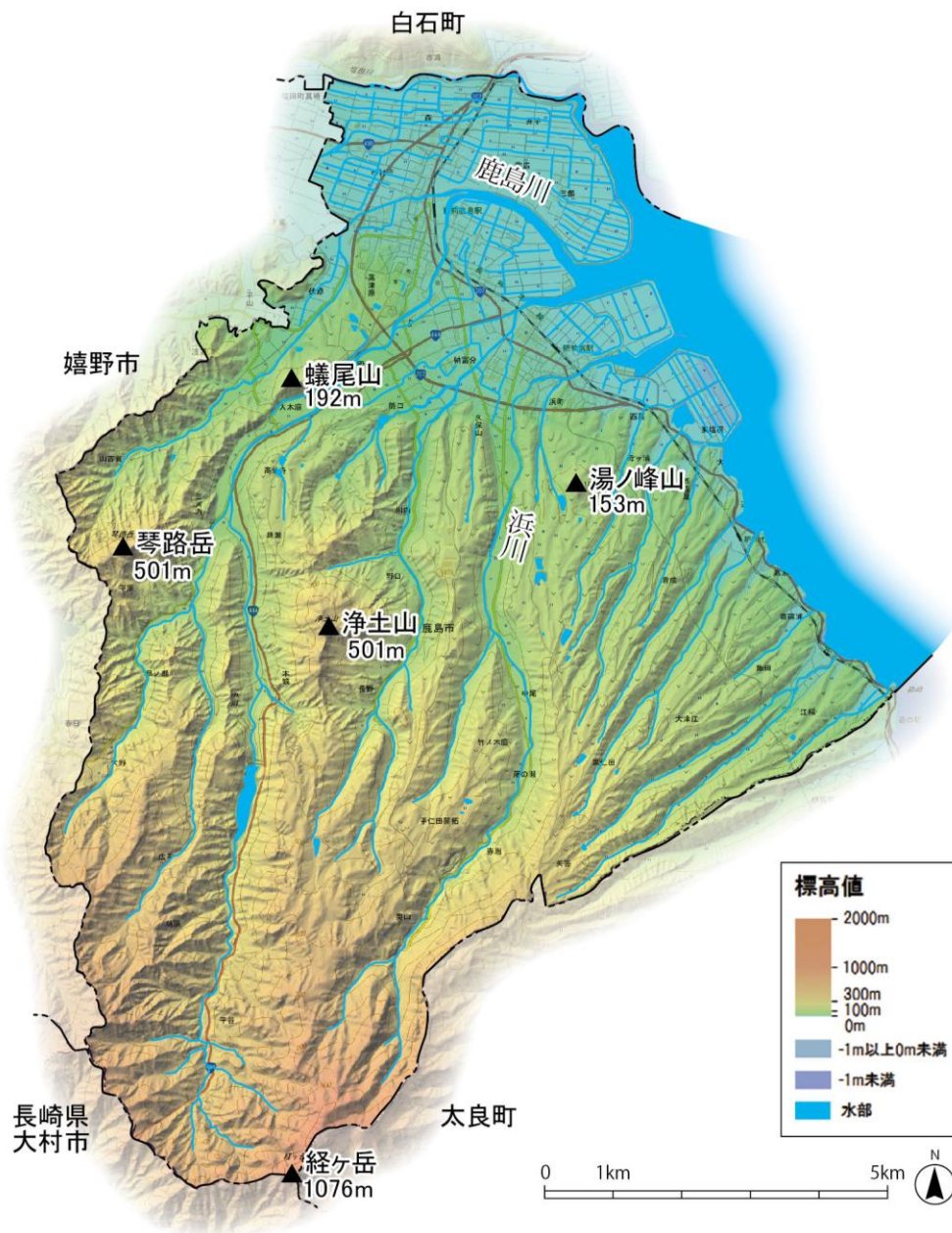
(2) 地形・地質・水系

1) 地形

地形は、県内最高峰の標高 1076m である ^{きょうがたけ} 経ヶ岳を主峰として、標高 501m の ^{じょうど} 浄土山や 501m の ^{ことしだけ} 琴路岳などの多良岳山系の山々が市内南部に連なっている。

また、山頂部から流れる河川による侵食の影響で経ヶ岳を中心とした放射状の谷が裾野まで広がっているため、上流域では深い渓谷が、下流域となる市内北部では沖積低地としての ^{はまがわ} 鹿島平野が形成されている。

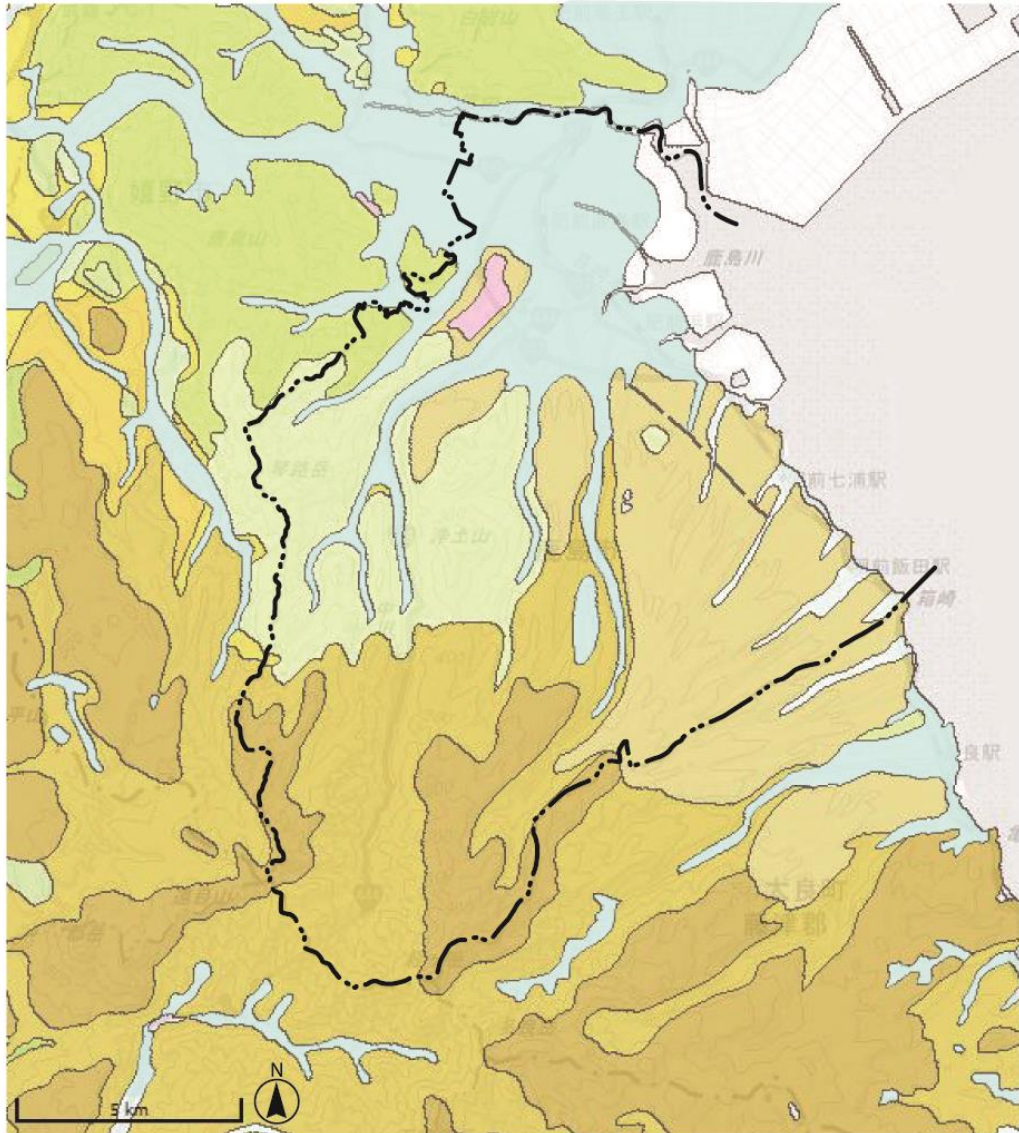
鹿島川、浜川等の河口周辺は近世以降に干拓された干拓地である。



図：地形（出典：国土地理院ウェブサイト（地理院タイルを加工して作成））

2) 地質

本市南部の多良岳山系の山々は約 100 万年前頃に起きた数度の火山活動によって形成されたもので、なだらかな裾野を持つ成層火山であり、地質は安山岩質の岩石が主体となっている。



凡例	岩相	地質時代
	人口改変地	完新世
	堆積岩類	更新世～完新世
	火砕流	
	火山岩屑なだれの堆積物	中新世～完新世
	段丘堆積物	更新世
	安山岩・玄武岩類	
		中新世～鮮新世
		中新世
	堆積岩類	漸新世～中新世

図：地質(出典:産総研地質調査総合センター シームレス地質図(基本版)、クリエイティブ・コモンズ・ライセンス 表示 2.1)

3) 水系

本市を流れる主要河川は、経ヶ岳に端を発し、本市東方の有明海に注いでいる。主な河川には中央を南北に流れる中川や、石木津川、浜川、また、本市北部を流れる鹿島川、さらに本市と白石町の境を流れる塩田川などがある。1年を通して水が豊富で澄んでおり、周辺の自然環境が変化に富んでいることから、浜川上流では、小学生によるホタルの放流が行われている。

有明海は、日本最大の干潟を有し、約6mの干満の差がある。

平成19年(2007)には、中川上流部に県営の多目的ダムである中木庭ダムが竣工した。



図：水系

4) 動植物の生育環境

経ヶ岳及び多良岳一帯は「多良岳県立自然公園」に指定されている。山の中腹以上にはシキミーモミ群集やアカマツ群落に代表される自然林が見られる。山麓から中腹にかけてはシイ、カシなどを中心とした二次林や、スギ、ヒノキなどの人工林が多い。

広大な干潟を持つ有明海はムツゴロウやワラスボなどの生息地となっている。肥前鹿島干潟は平成 27 年（2015）5 月にラムサール条約湿地に登録されており、ズグロカモメやクロツラヘラサギなどが飛来する生態系が維持されている。また、本市北部の新籠^{しんごもり}干潟は東アジア・オーストラリア渡り性水鳥重要生息地ネットワーク（シギ・チドリ類）に登録されている。

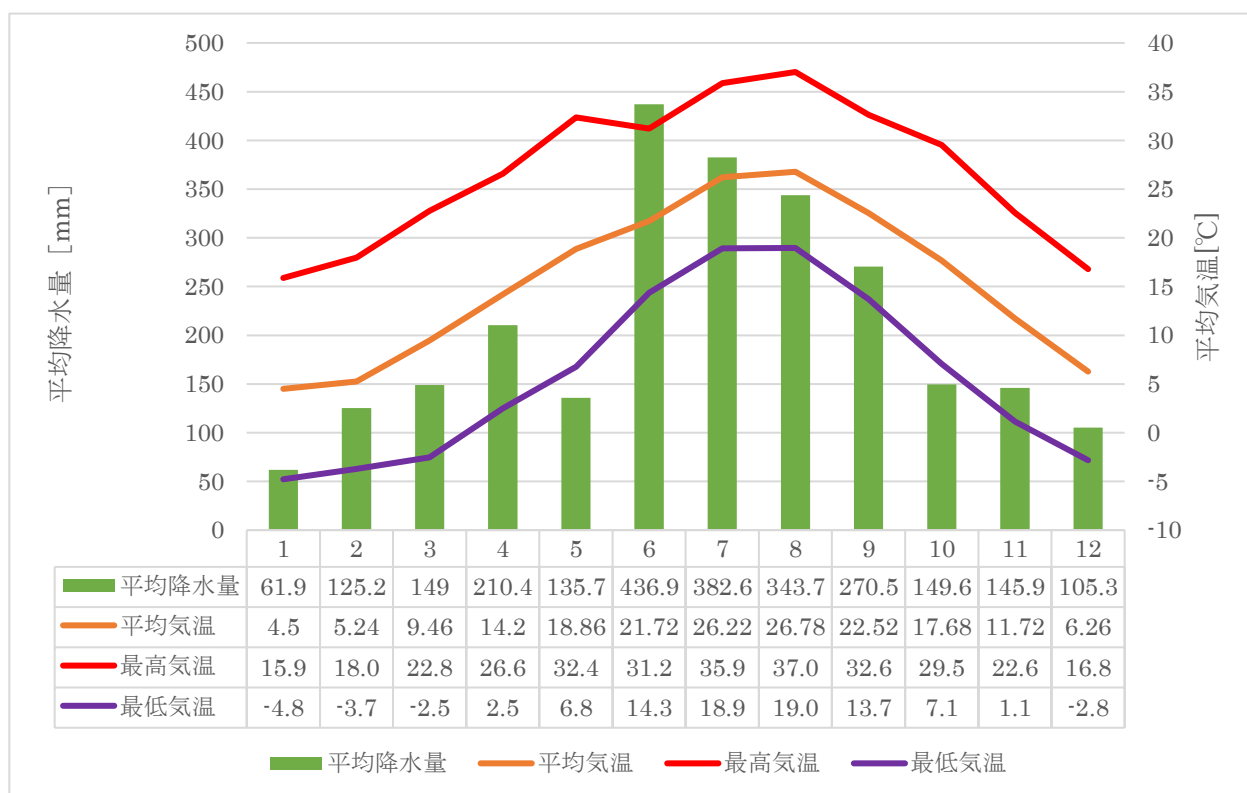


図 植生 (1/25,000 植生図「佐賀県鹿島市」GIS データ(環境省生物多様性センター)を使用し、作成・加工)

(3) 気象

本市に最も近い嬉野気象台の観測データを基にした過去5年間の平均降水量と平均気温、最高気温、最低気温を下図に示す。降水量は6月～9月にかけて多く、年降水量は1800mm前後、多良山系周辺では2500mmを超えることがある。平均気温は7月～8月に26℃前後、12月～2月に5℃前後で、年平均気温は15℃前後である。夏季には最高気温が35℃を超える猛暑日となる日も多く、一方で、冬季には最低気温が氷点下を下回る日もあるなど、寒暖の差が大きい。

本市は温帯湿潤性気候(温帯モンスーン気候)に属し、内陸型気候に近くなっている。



図：平均降水量と気温（平成24年（2012）～平成28年（2016））（気象庁HPを基に作成）

2 社会的環境

(1) 土地利用

1) 市の沿革

本市は昭和 29 年（1954）に鹿島町、能古見村、^の古枝村、^ご浜町、^み鹿島村が合併し、誕生した。その後、昭和 30 年（1955）に七浦村と合併し、行政区域が拡大され、現在の市域となった。

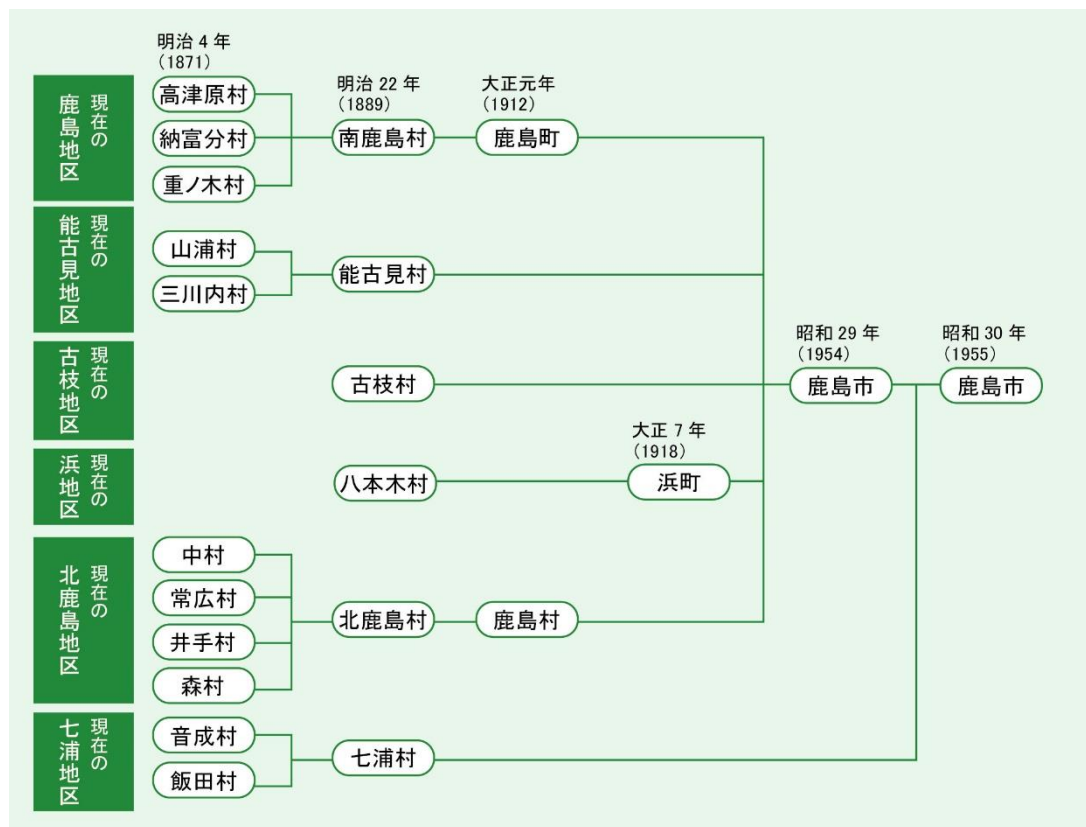
各町村については、明治 22 年（1889）に高津原村、納富分村、^な重ノ木村が合併し、南鹿島村が誕生、山浦村と三川内村が合併し、能古見村が誕生、中村と常広村、井手村、森村が合併し、北鹿島村が、^お音成村と^な飯田村が合併し、七浦村が誕生した。さらに大正元年（1912）に南鹿島村が鹿島町に、北鹿島村が鹿島村となって誕生したものである。また、大正 7 年（1918）に八本木村が浜町になった。

昭和 30 年（1955）以降は、北鹿島地区、鹿島地区、浜地区、能古見地区、古枝地区、七浦地区の 6 地区で構成されている。



図：現在の地区境

（『平成 28 年度版 統計からみた鹿島市』より転載）



図：市の沿革（『鹿島市年表』を基に作成）

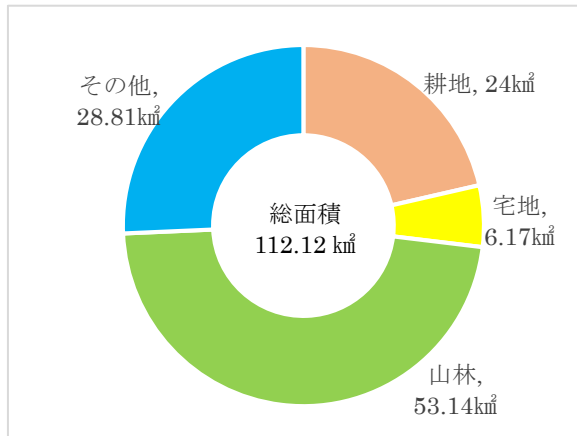
2) 土地利用の現状

本市の総面積は 112.12 km² であり、海岸線延長は 19.4 km である。

地区別の面積は北鹿島 8.14 km²、鹿島 7.39 km²、浜 4.66 km²、能古見 56.72 km²、古枝 14.30 km²、七浦 20.91 km² である。

また、地目別面積は耕地 24.00 km²、宅地 6.17 km²、山林 53.14 km²、その他 28.81 km² である。

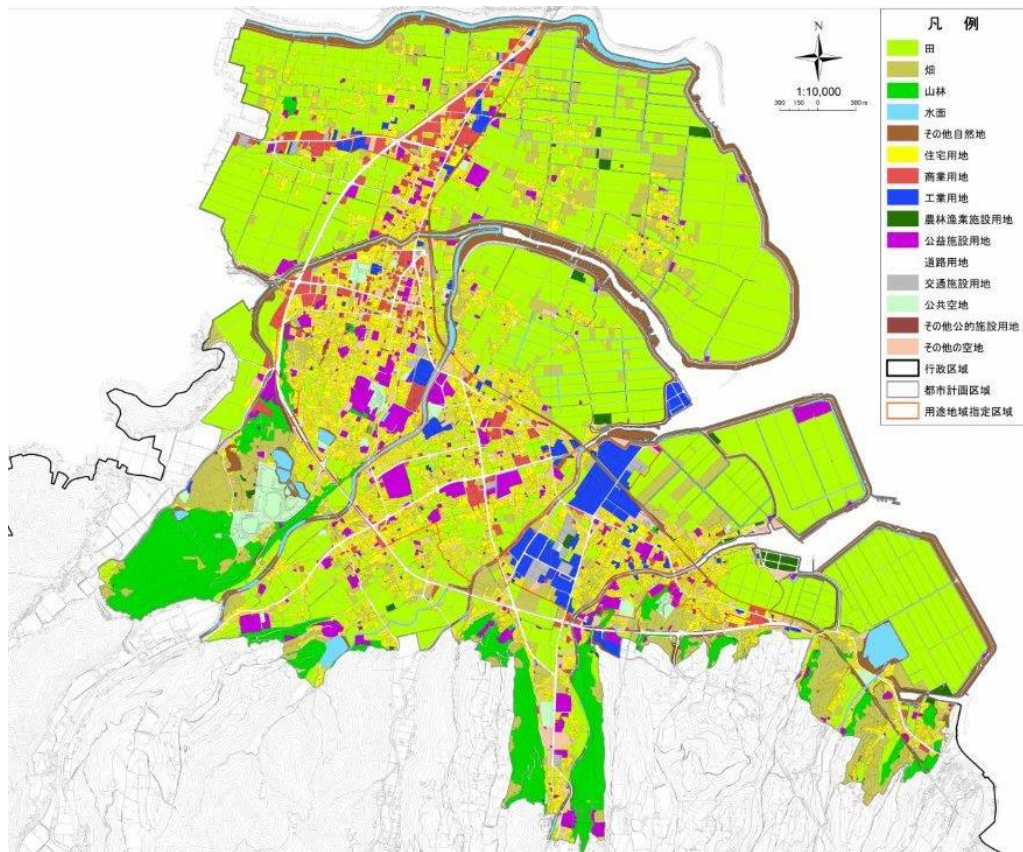
わずかな平坦地や有明海に面した干拓地で米や麦などの農産物が生産されており、七浦地区丘陵地を中心として柑橘類の樹園地が多い。



図：地目別の面積 [km²]

写真：ミカン畑

(平成 28 年版「佐賀県統計年鑑」を基に作成)



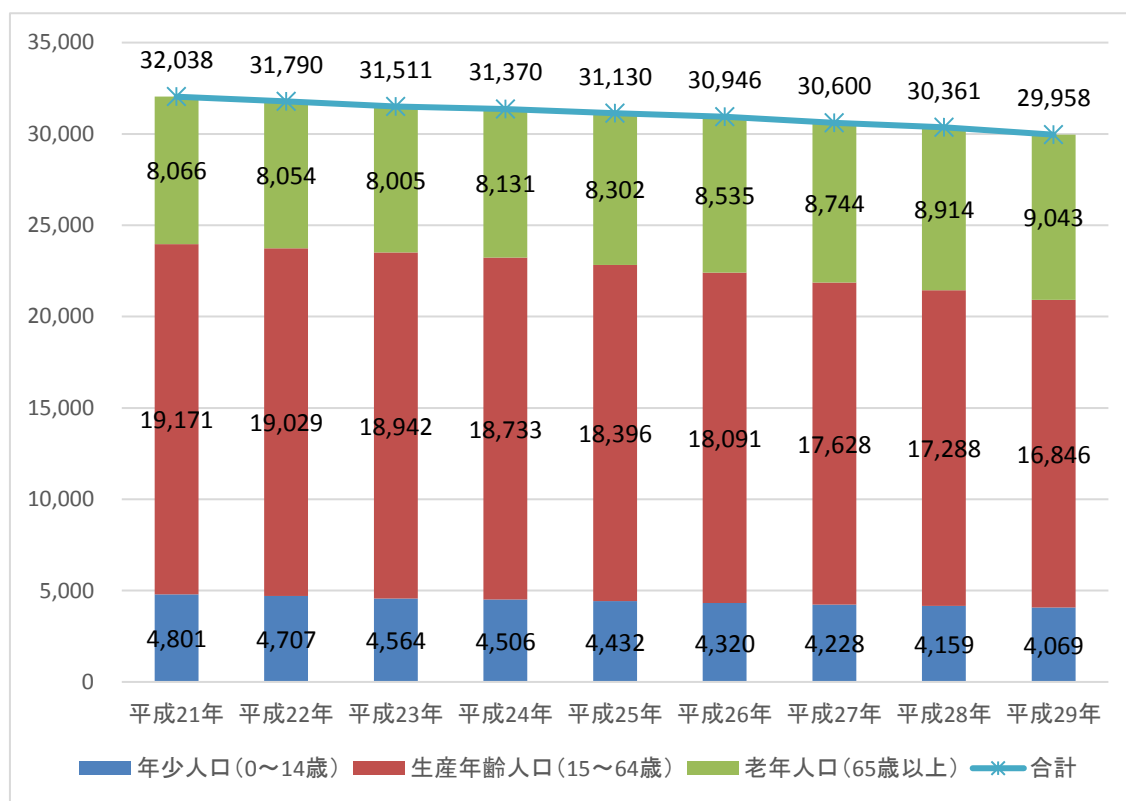
図：土地利用状況（都市計画基礎調査（平成 30 年（2018）3 月）より）

(2) 人口動態

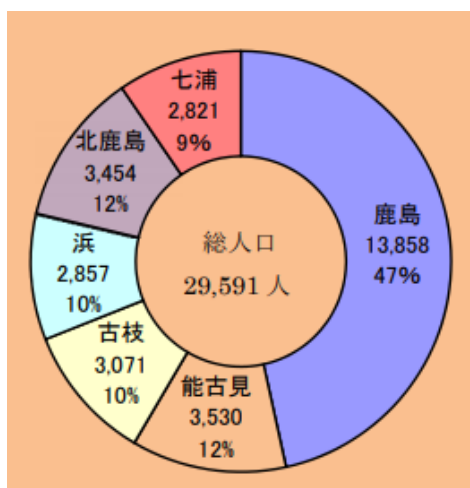
本市の人口は、平成29年(2017)時点で29,958人であり、これは5年前の平成24年(2012)時点の31,370人と比較すると、4.5%減少している。

年代別人口は、平成29年(2017)時点で、0～14歳の年少人口が4,069人、15～64歳の生産年齢人口が16,846人、65歳以上の老年人口は9,043人となっている。これより、65歳以上の人口が全体の30.2%となっており、高齢化が顕著であるといえる。一方、0～14歳の人口は全体の13.6%にとどまり、減少傾向にある。このように、少子高齢化が進行していると分かる。

地区別人口は鹿島地区が13,858人と全体の47%を占め、次いで、能古見、古枝、浜、北鹿島、七浦となっている。



図：人口(鹿島市「年齢別人口統計」を基に作成)



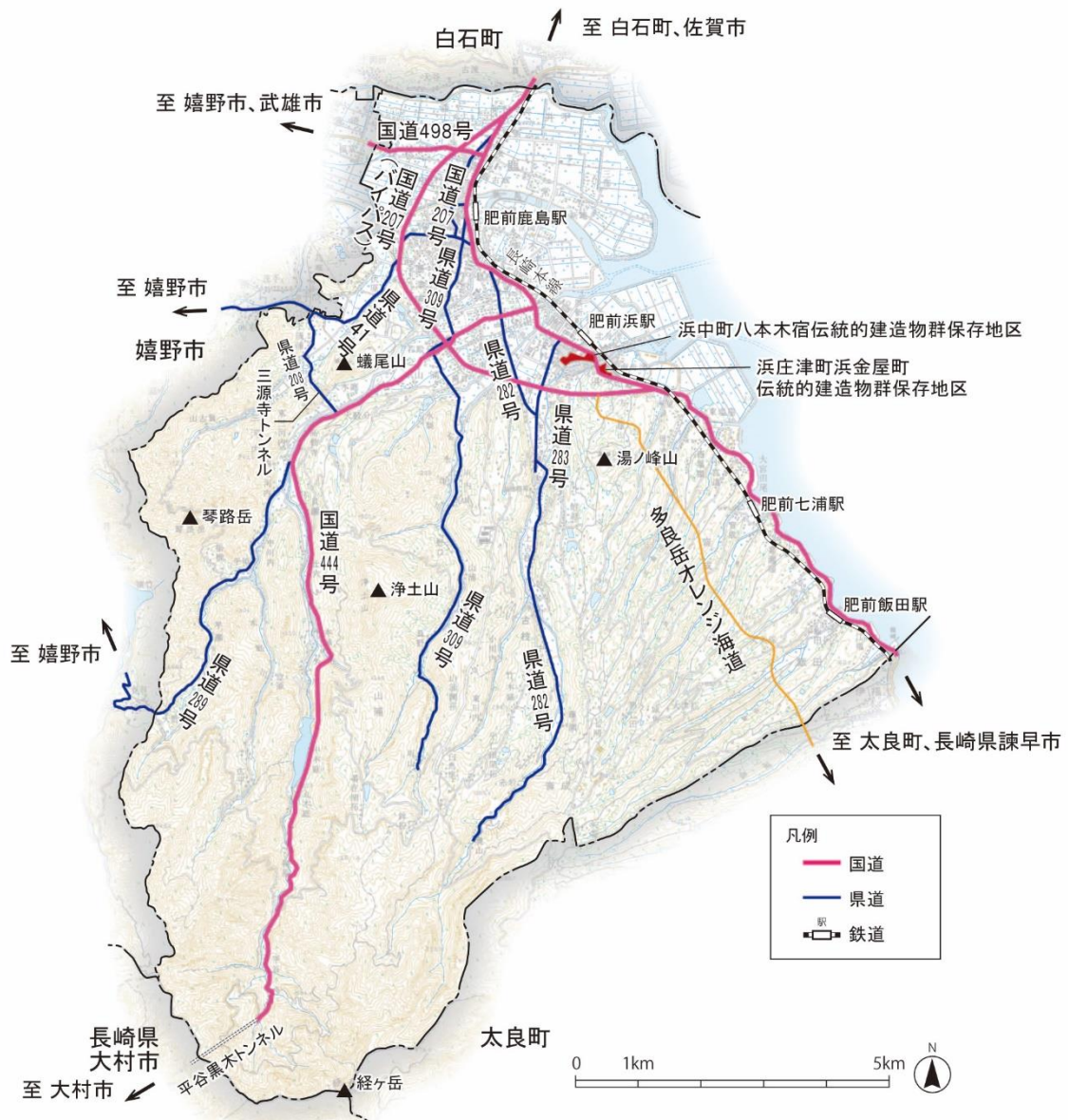
図：地区別人口(『平成29年度版 統計からみた鹿島市』(人口データは平成30年(2018)3月31日時点を使用している)より転載)

(3) 交通機関

本市には、佐賀市を起点とする国道 207 号が海岸線に沿って南北に通っており、さらに本市北部より分岐したバイパスが整備されている。七浦地区には、山地の中腹を、バイパスから分岐した広域農道「多良岳オレンジ海道」が通る。また、北鹿島の中央部を東西に国道 498 号が延びている。市内を東西に分断する中川沿いには国道 444 号が走り、平谷黒木トンネルにより長崎県大村市と接続している。このほか、県道 41 号、208 号、282 号、283 号、289 号、309 号等が整備されている。

鉄道は、鳥栖駅から長崎駅を結ぶ九州旅客鉄道（長崎本線）が市街地の東側、海岸線に沿って通り、肥前鹿島駅、肥前浜駅、肥前七浦駅、肥前飯田駅の 4 駅が置かれている。肥前浜駅は祐徳稲荷神社に最も近く、長崎本線開通以来、参拝者の交通の玄関口となっている。

その他の公共交通機関には、路線バスと市内循環バスがあり、路線バスは市街地から山中までを結び、市内循環バスは市街地を巡っている。



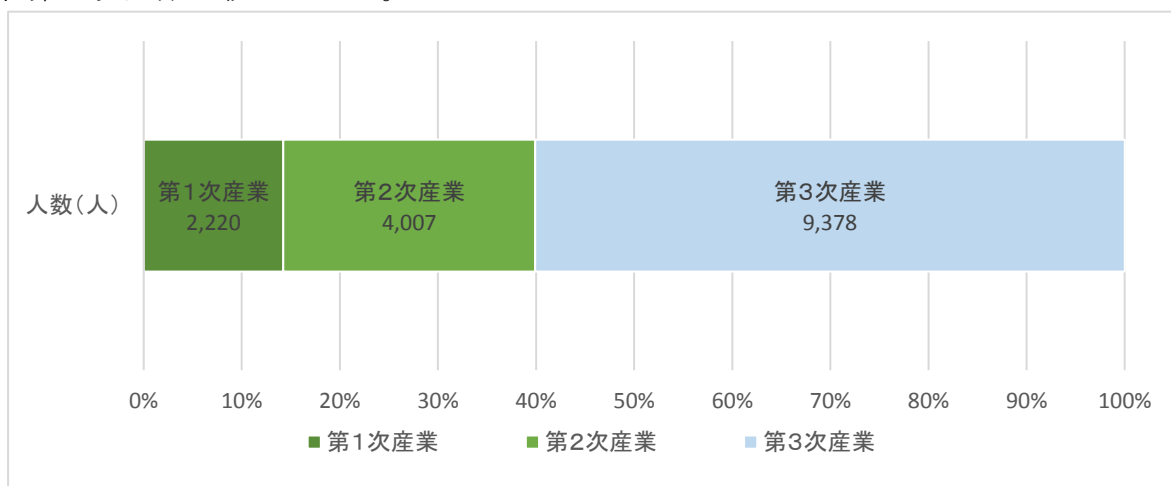
図：交通網

(4) 産業

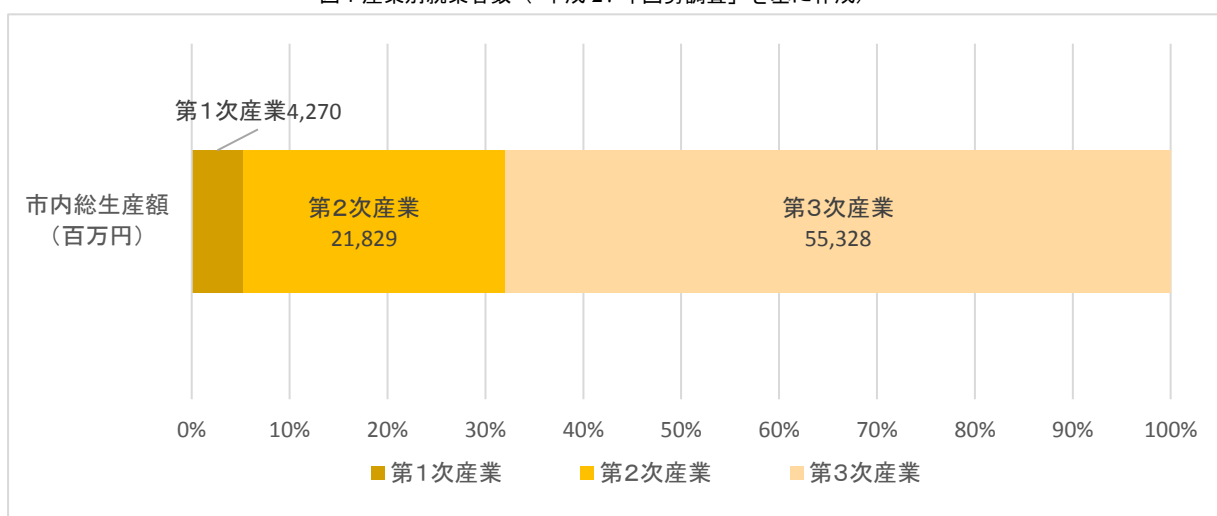
1) 産業別就業人口と市内総生産額

本市は、多良岳山系から有明海に注ぐ豊かな水系を有し、有明海沿岸では干潟漁業が営まれるなど、多くの地場産業が行われているが、産業別就業者数を見ると、第3次産業（商業・サービス業）の就業人数が全体の約6割を占めている。次いで、第2次産業（工業・製造業）、第1次産業（農林水産業）となっている。

また、産業別の総生産額でも、第3次産業が全体の6割以上を占めており、第2次産業、第1次産業と続いている。



図：産業別就業者数（「平成 27 年国勢調査」を基に作成）



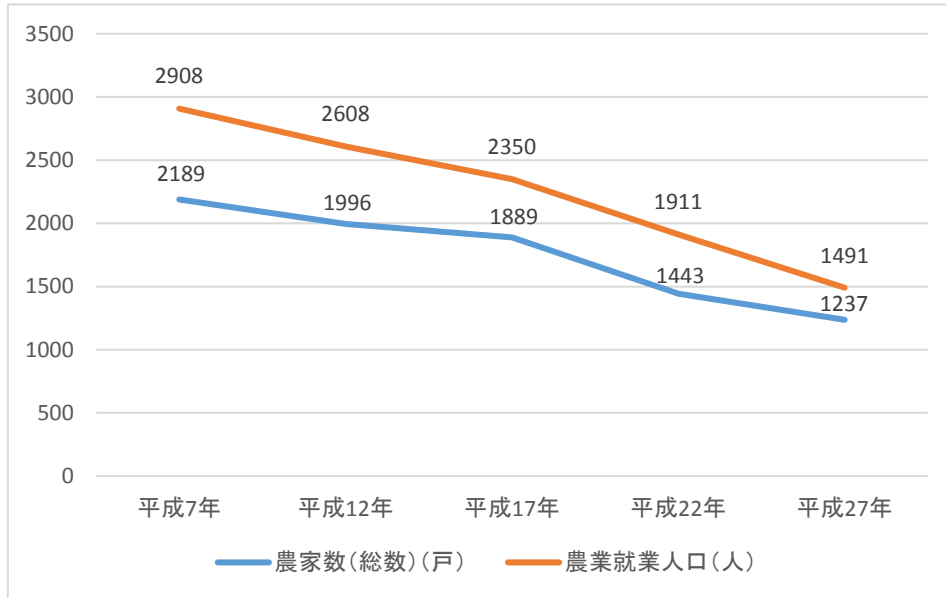
図：産業別市内総生産額（「平成 26 年佐賀県市町民経済計算」を基に作成）

2) 農業

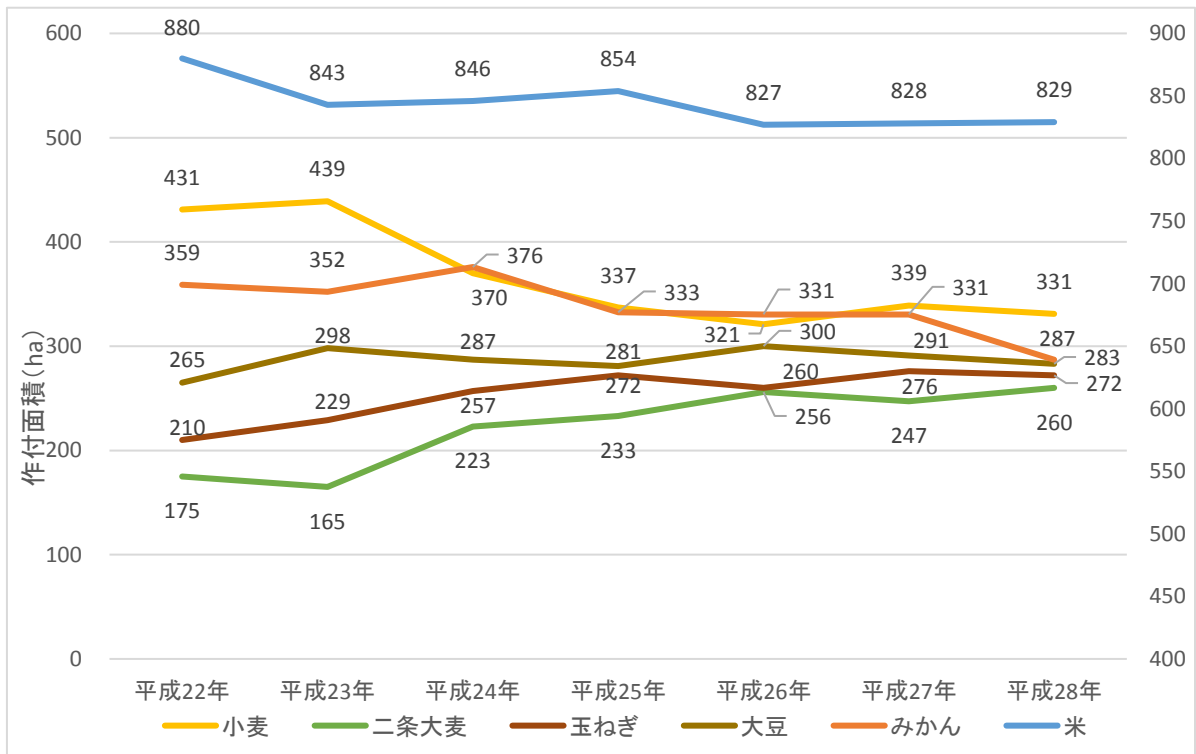
本市ではわずかな平坦地や有明海に面した干拓地で農業の生産が行われてきた。平成27年(2015)時点では、農家数1,237戸、農業就業人口1,491人であり、平成7年(1995)から比較すると、どちらも減少傾向にある。

昭和39年(1964)以降、多良岳山麓部の開墾が行われ、大規模なミカン栽培が行われるようになっており、現在、米、麦、ミカン、たまねぎが主な農作物となっている。

平成22年(2010)以降の推移を見ると、小麦とミカンの生産は減少傾向にあるが、その他の農作物は横ばいから、やや増加傾向にある。



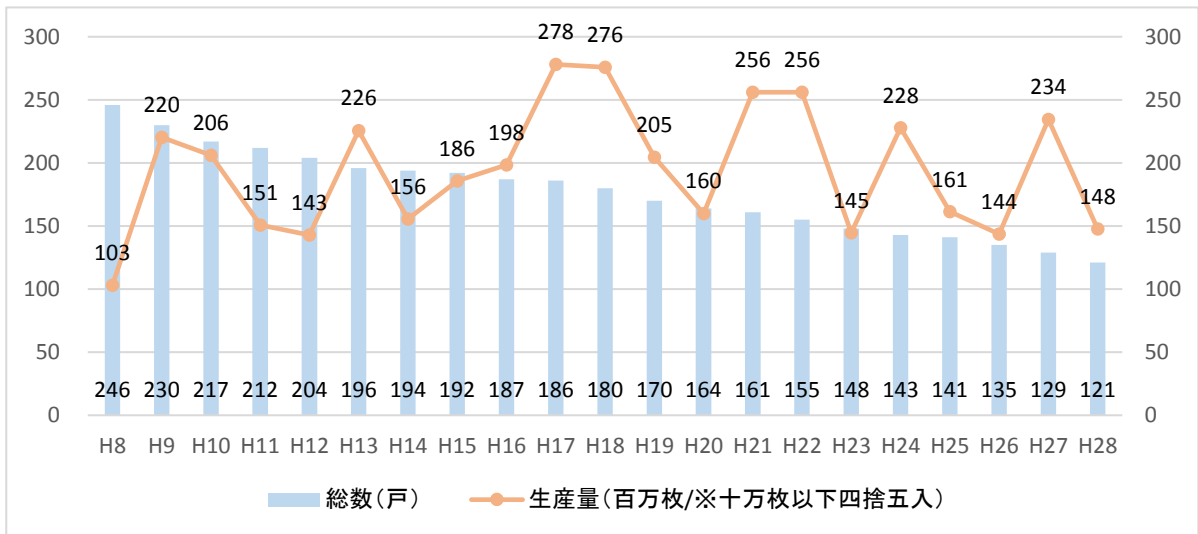
図：農家数・農業就業人口の推移(「農林業センサス」を基に作成)



図：主な農作物の作付面積の推移(「農林水産省・作況調査」を基に作成)

3) 海苔養殖業

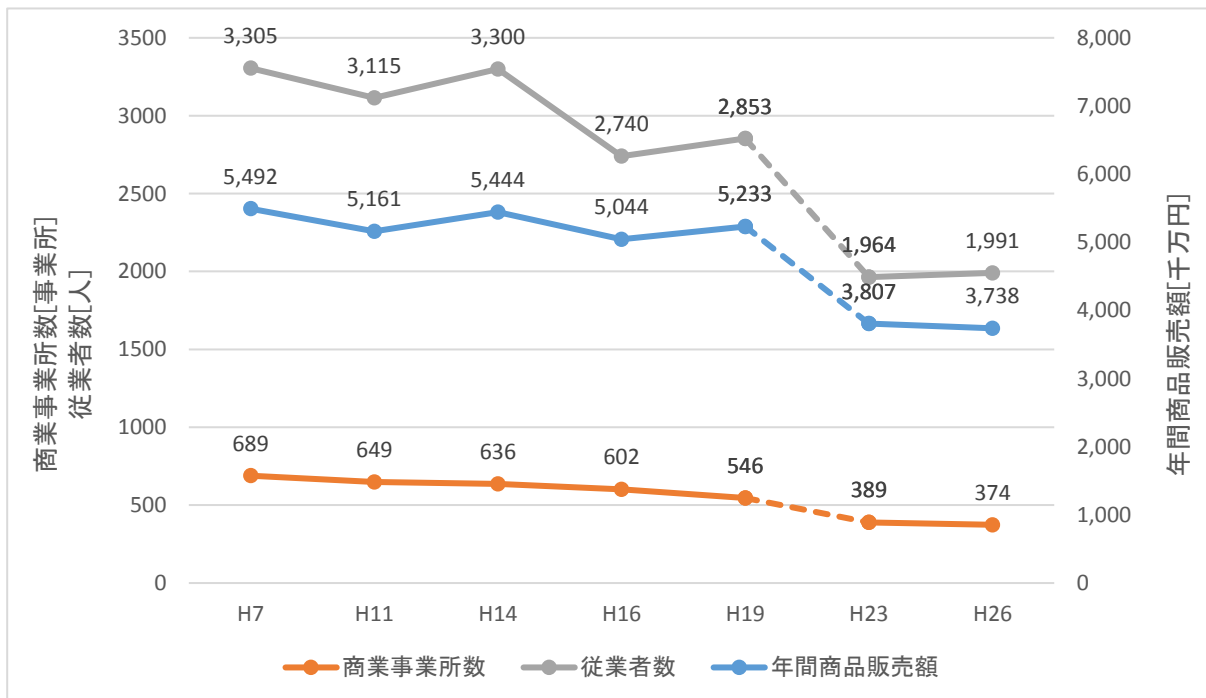
本市では、有明海の最大6mにもなる干満の差を利用した海苔の養殖が盛んであり、生産量は約1億4千万枚から2億8千万枚の間を推移している。しかし、海苔養殖に従事する戸数は年々減少しており、平成28年(2016)では121戸である。



図：海苔養殖従事戸数および生産量

4) 商業

平成26年(2014)時点の商店数は374事業所、従業者数は1,991人、年間商品販売額は3,738千万円である。商業事業所数は減少傾向にあり、従業者数と年間商品販売額は、増減を繰り返しているが、平成23年(2011)と平成26年(2014)を比較すると従業員数は増加、年間商品販売額は減少している。



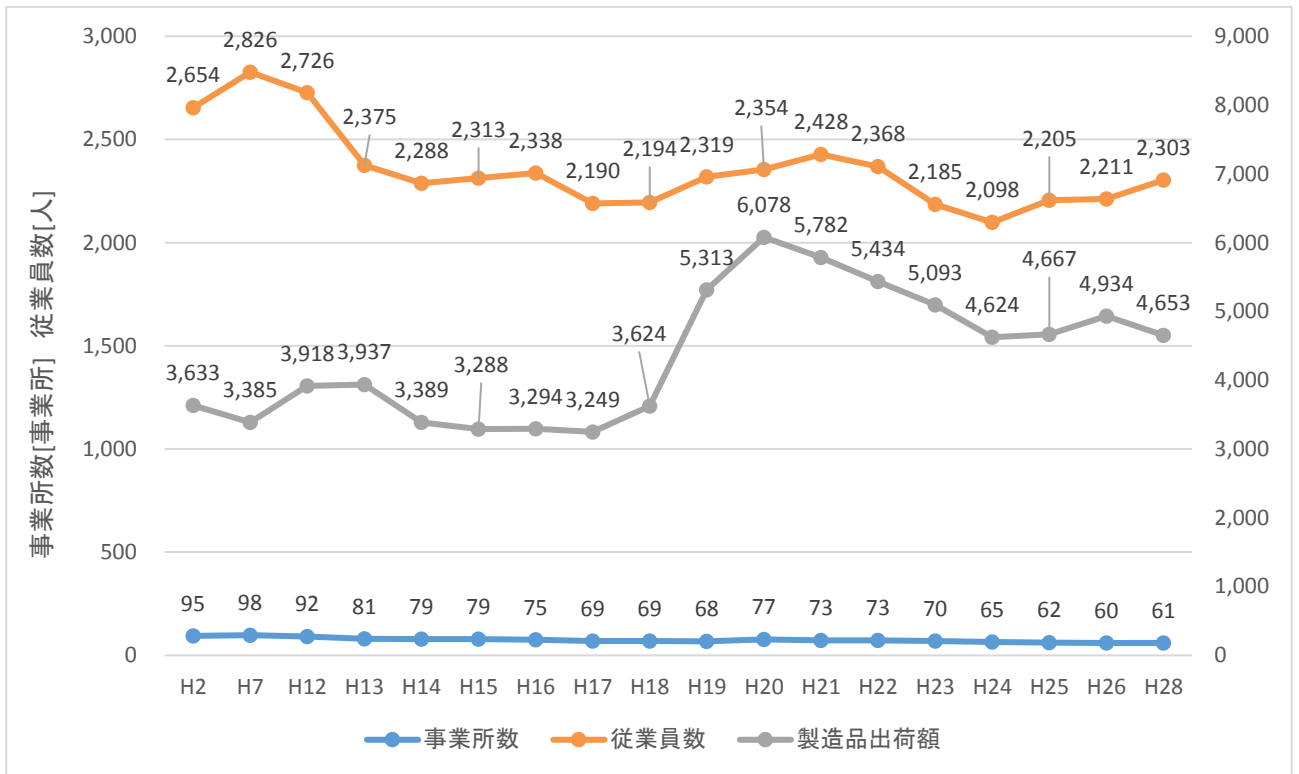
図：商業の事業所数・従業者数および年間商品販売額の推移（商業統計調査、経済センサスを基に作成）

※商業統計調査は、日本標準産業分類の第12回改定及び調査統計の大幅変更を行ったことに伴い、前回実施の平成19年(2007)調査の数値と平成23年(2011)調査の数値は接続していない。(経済産業省HP/統計/商業統計を参照)

5) 工業

平成 26 年（2014）時点の事業所数は 60 事業所、従業者数 2,211 人、製造品出荷額 4,934 千万円である。いずれも平成 2 年（1990）から平成 17 年（2005）までは緩やかに減少傾向にあったが、平成 18 年（2006）頃から増加し、その後平成 20 年（2008）からは再び減少傾向に転じている。

本市のものづくりの技術を支える企業としては、船舶用エンジンのシリンダライナ製造メーカーや、油圧プレス製造メーカーがあり、世界に誇る技術をもっている。

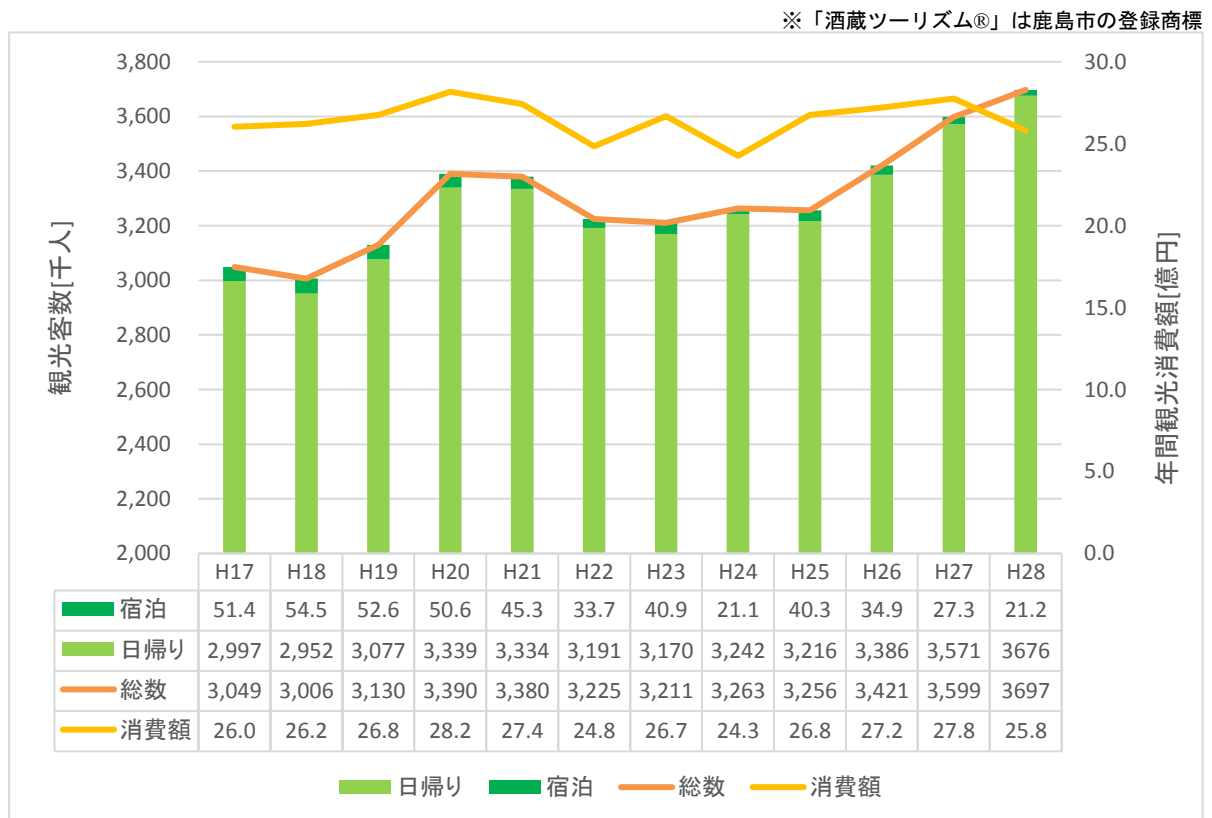


図：工業の事業所数・従業者数および製造品出荷額の推移（「工業統計」を基に作成）

6) 観光

観光入込客数は平成 22 年 (2010) から平成 25 年 (2013) にかけて、約 320 万人でほぼ横ばいである。しかし、平成 25 年 (2013) から増加を続け、平成 28 年 (2016) には約 370 万人にまで増えている。一方、年間観光消費額は、わずかな増減はあるものの、26 億円前後で、ほぼ横ばいを続けている。

中でも^{はまなかまちはちほんぎしゆく}祐徳稲荷神社、重要伝統的建造物群保存地区の「^{はましろう}浜中町八本木宿地区」「^{つまちはまかなやまち}浜庄津町浜金屋町地区」を合わせた地区の範囲である、通称「肥前浜宿」が多くの集客を担っており、酒蔵見学や日本酒をテーマにした「鹿島酒蔵ツーリズム®」や、有明海の干潟を利用した競技が行われる鹿島ガタリンピックなどのイベントにも、県内外から多くの観光客が訪れている。



図：観光入込客数の推移（「佐賀県観光動態調査」を基に作成）

表：施設ごとの観光客数（「平成 29 年度 観光動態調査」を基に作成）（単位：人）

祐徳稲荷神社	道の駅鹿島	祐徳温泉「宝の湯」	平谷物産直売所	幸姫酒造
3,543,037	102,846	82,603	70,250	24,600
峰松酒造場 (肥前屋)	継 場	誕生院	平谷温泉(入浴のみ)	蓮蔵院
15,406	9,939	9,413	19,289	993

表：行事・イベントごとの観光客数（「平成 29 年度 観光動態調査」を基に作成）（単位：人）

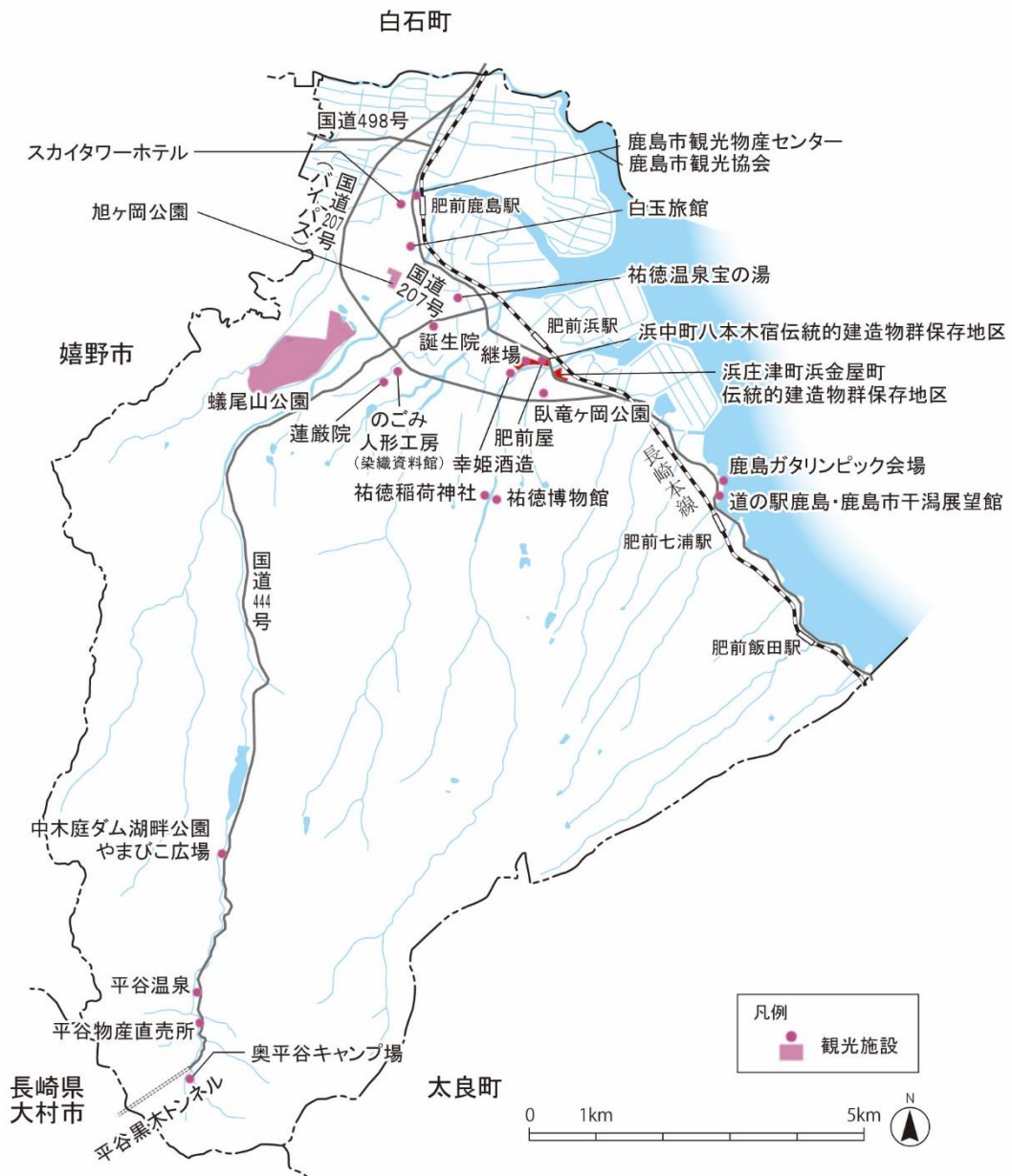
鹿島酒蔵ツーリズム® ・蔵々まつり・ふな市	旭ヶ岡公園 桜まつり	鹿島おどり	鹿島 ガタリンピック	鹿島市民 納涼花火大会
32,800	30,000	20,000	18,000	10,000



写真：鹿島酒蔵ツーリズム®



写真：鹿島ガタリンピック（『鹿島市市勢要覧』より転載）



図：観光施設（『鹿島観光パンフレット』を基に作成）

<コラム> 鹿島ガタリンピック

鹿島ガタリンピックは有明海の広大な干潟を舞台に、押し板に乗り干潟の上を進む速さを競う「ガタスキー」、ターザンロープで干潟に飛び込む飛距離を競う「ガターザン」、ブレーキの無い自転車で、干潟の上に置かれた幅の狭い板の上を走る速さを競う「ガタチャリ」、干潟の上で行う障害物競走である「The Gatalympic」といったユニークな競技が楽しめるイベントである。昭和60年（1985）に始まったもので、昭和63年（1988）には同じ干潟を持つ、韓国高興郡こうふんぐんの選手団を招待し、以降、交流が行われている。また、平成4年（1992）には釜山外国語大学の教授や学生が参加するなど、国際交流が続いている。

企画運営は「フォーラム鹿島」を中心としたボランティア団体が行っている。



写真：The Gatalympic



写真：ガタスキー

3 歴史的環境

(1) 歴史

本市の歴史は、今から約 100 万年前に起きた数度の火山活動によって形成された多良岳火山と、約 80 万年前に起きた阿蘇山大噴火の噴出物によって堆積された有明海の干潟に囲まれた自然環境を土台としている。その後、中世以降の干拓によって、平野部が拡大していくが、とりわけ、鹿島鍋島藩の藩政により多くの干拓、土木工事が進展した。さらにこの時期には鹿島城が築かれ、長崎街道を取り込んだ城下町、宿場町、港町としての骨格が形成された。近代以降、町村合併を重ね、拡大、発展し、昭和 30 年（1955）に現在の鹿島市となった。

城下町、宿場町、港町が育んだ多彩な文化や有明海と多良岳山系に囲まれた集落での営みが伝統行事や祭礼、産業、信仰、技術等として、現在の鹿島市に脈々と受け継がれている。

1) 原始・古代

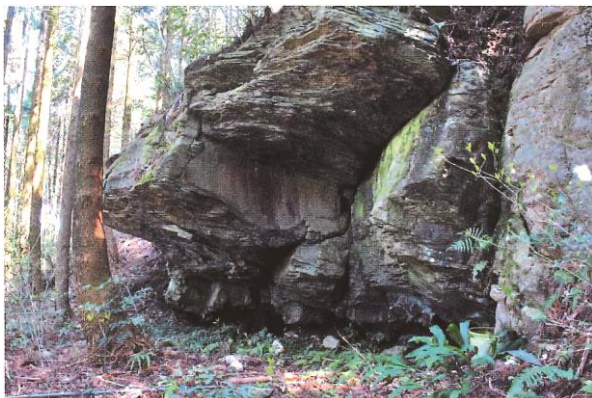
①縄文・弥生時代：鹿島の起こり

市内各地では、縄文時代後期の石器や土器が出土しており、遺跡の分布は、多良岳中腹、丘陵地、谷部の平地、海岸沿いなど広域にわたっている。

古枝平仁田地区にある儀助平洞穴遺跡は、縄文時代前期から古墳時代後期にかけての長期的な遺跡であり、縄文時代の遺物として、押型文土器や条痕文土器、黒曜石などの石器が出土している。

弥生時代の遺跡は、鷺の巣、城内、横田、行成、末光、納富分、馬渡、久保山、野畠、古枝、鮎越、西塩屋貝塚があり、その多くが農業に必要な水利が得られる中川、浜川、石木津川などの流域に分布している。西塩屋貝塚からは、漁業を行っていたことも推察されている。さらに、旭ヶ岡公園内などからは、甕棺墓や石棺墓が発見されている。

また、『鹿島市史』（1974）によれば、標高 5 m の等高線が有明海の潮汐境界をなし、これに沿って「浦、崎、津」を末尾に付した地名が多数分布することから、この頃の海岸線は標高 5 m の等高線上にあったと推察されている。



写真：儀助平洞穴（出典：『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』） 写真：西塩屋貝塚（出典：『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』）

②古墳～奈良時代：律令制度に基づく藤津郡の成立

文武2年(698)、この地方は西海道肥前さいかいどう ひぜん国藤津郡能美郷のくにふじつごおりのみごうと呼ばれ、大宰府の管轄下のもと中央政府の統治を受けるようになったと伝わる。

藤津郡の地名の由来について『肥前国風土記』(奈良時代初期)によれば、「昔、日本武尊やまとたけるのみことがお出でになった時、この津に到り、日が西山に没したので船を泊められた。翌日ご覧になると、船のともづなを大きな藤の木につないでいた」ことに因むとされている。現在も鹿島市末光には「藤の森」遺跡と「藤津」の小字を残している。

また、「景行天皇がおいでになり、この地方の土蜘蛛つちぐも(土地の賊徒)を、紀直きのあたえの祖先である釋日子わかひこに討伐させた際、土蜘蛛は叩頭ののみて平伏した。そこでこの地方を能美郷ののみという...」と記されている。当時、当地方は朝廷に対する抵抗勢力圏であり、在地勢力を討伐したとされる釋日子は、後に「葛津立国」の初代国造くこのみやつこに任命された人物と同一であると考えられ、「能美郷」と呼ばれた能古見・鹿島の中川扇状地一帯が、当時の中心地であったことなどが推察されている。

古墳時代の遺跡は、鷲の巣石棺、よいごろ坂古墳、妙見渚古墳群、浅浦古墳群、えんしょう蔵古墳、水梨古墳群、久保山古墳群、行成古墳群、浜校舎石棺、陣の山古墳群、五畝田古墳群、竜宿浦石棺、江橋古墳群があり、低丘陵地、扇状地、海岸付近などに分布している。中でも、7世紀に築かれたものと推定される鹿島行成地区の「鬼塚」古墳は、佐賀県屈指の巨石墳墓であり、葛津立国に関するものではないかと考えられている。



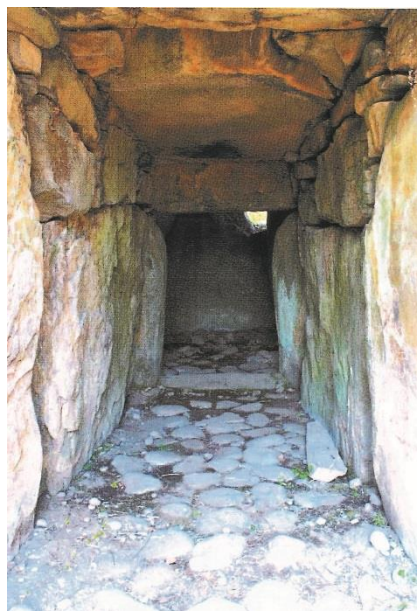
写真：「藤の森」遺跡

(出典：『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』)



写真：五畝田古墳副葬品

(出典：『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』)



写真：行成の「鬼塚」古墳

(出典『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』)

③平安時代：仁和寺の荘園

平安時代の初め頃に、鹿島を中心とする藤津郡一帯は京都の有力寺院である仁和寺の荘園となり、藤津荘と呼ばれ、広大な地域を占めるようになった。

大殿分の蓮蔵院は、かつて栄華を誇ったとされる金剛勝院の流れをくむ仁和寺系統の真言宗寺院である。ここには、国指定の重要文化財の仏像3体が安置されており、平安仏教文化を伝えている。



写真：かつての茅葺の蓮蔵院（現在は瓦葺き）

（出典：『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』）



図：主な遺跡の分布と古代の地形（推定）

2) 中世

①鎌倉時代～戦国時代：地方勢力大村氏による支配と中世山城

鎌倉時代、肥前国の守護は、鎌倉幕府の成立後、鎮西奉行となった武藤資頼むとうすけよりが筑前、豊前と肥前の守護も兼務したのが始まりとされる。

その後、大村氏が急速に成長し、13世紀中頃には、浜に松岡城を構え、藤津郡一帯に勢力を張っていた。大村氏による統治は南北朝時代に入っても続き、文正元年(1466)、大村家親おおむらいえちかは高津原に戦などの非常時に拠点とする山城である蟻尾城ありおじょう（蟻尾山一帯）を築いた。鹿島平野を一望できるこの城は、小城おぎに本拠地を置く千葉氏に備える絶好の場所であった。

文明9年(1477)頃の戦いで蟻尾城は落城し、城主大村家親は能古見方面へと落ちのびたという。13世紀頃から15世紀後半まで約200年、事実上、鹿島を支配していた大村氏であったが、千葉氏の度重なる侵略と島原半島を本拠地とし、急速に勢力を伸ばしていた有馬氏きょうげきに挟撃される形で次第に衰亡していった。

②安土桃山時代：有馬氏・龍造寺氏による覇権争いと城造り

大村氏に代わって、明応3年(1494)頃に藤津地方を領有したのは有馬氏であった。有馬氏は浜の臥龍ヶ岡がりゅうがおかに琴比羅宮ことひらぐう（現在の事比羅神社）を勧請したほか、松岡城、鹿島の横造城よこぞうじょう、鷲の巣城とりつけじょう、鳥附城、北鹿島の森岳城、常広城を防備の拠点とした。

龍造寺隆信たかのぶが天正4年(1576)、須古城すこじょう（現在の白石町にあった）に陣を張り、有馬氏の攻略に乗り出すと、たちまち松岡城は陥落、熾烈な決戦場となったのが横造城であった。この戦いに敗れた有馬氏は鹿島、藤津からの撤退を余儀なくされた。

九州地方平定を果たした豊臣秀吉は、龍造寺氏の家臣であった鍋島直茂なべしなおしげに相続権を与えた。これにより、事実上、鍋島氏が肥前国を支配することとなる。



写真：蟻尾城跡（出典：『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』）



写真：事比羅神社石段



図：中世に関わる建造物の分布

3) 近世

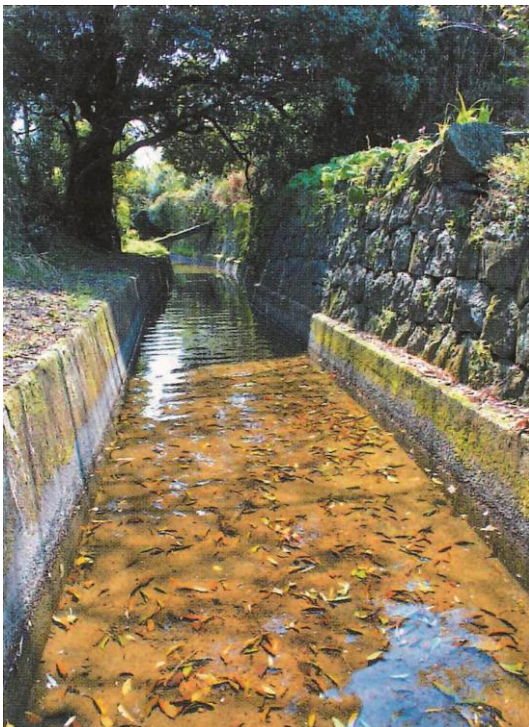
①江戸時代前期：鹿島鍋島藩による藩政

秀吉の死後、関ヶ原の戦いで西軍に加担し、敗れた鍋島直茂、勝茂父子は、徳川幕府の下で存亡の危機に立たされが、かろうじて地位と領土を守ることができた。家康に人質として差し出された直茂の次男の忠茂が、8年間の働きを認められ、病により帰国したことで、慶長14年（1608）、鹿島鍋島家の創設となった。

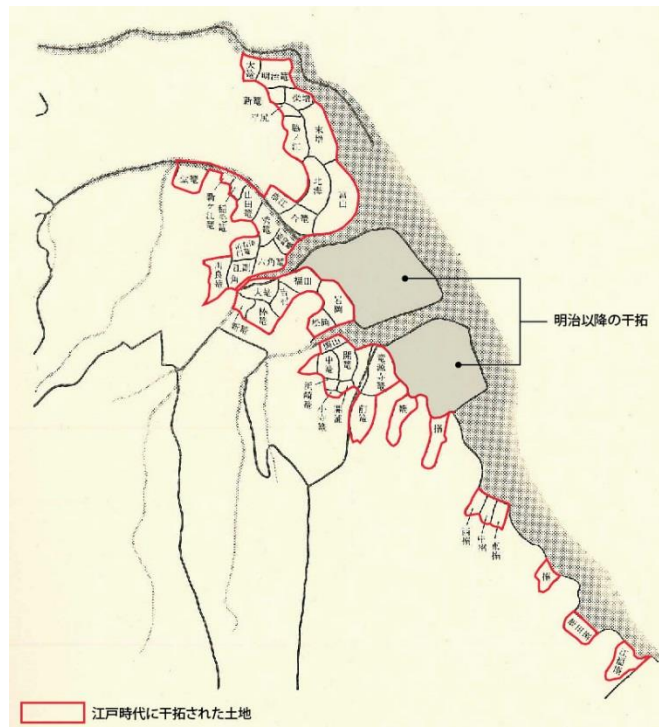
鹿島藩は経済力が乏しかったことに加え、洪水や暴風雨、高潮、早魃といった災害に度々苦しめられた。この問題に対して、三代藩主鍋島直朝は治水と干拓事業に力を注いだ。その成果のひとつが、寛文年間（1661～1673）に建設が進められた「鹿城川」（高津原水道）であり、蟻尾山の中腹を流れて高津原台地に流れる人口の川である。

この他にも、嶽水道、花木庭水道などが整備され、これらは、今日も水路として使われ、本市に豊かな実りと潤いを与えている。

また、有明海は潮汐の干満と、塩田川をはじめとした多くの中小河川の堆積作用で海底が低く、干潮時に広大な干潟が現れる干拓に適した土地であった。すでに干拓し、造成されていた北鹿島地区の新籠には、農民の居住を奨励し、各戸に1畝（約100㎡）の屋敷用の土地を与えた。寛文5年（1665）には30戸ほどの家に移住し、新籠村となった。この他、鹿島地区の重ノ木籠、浜地区の福添籠をはじめ、多くの干拓地が築造された。



写真：鹿城川（出典：『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』）



図：江戸時代の干拓（『鹿島市史』を基に作成）

表：鹿島鍋島家の歴代当主

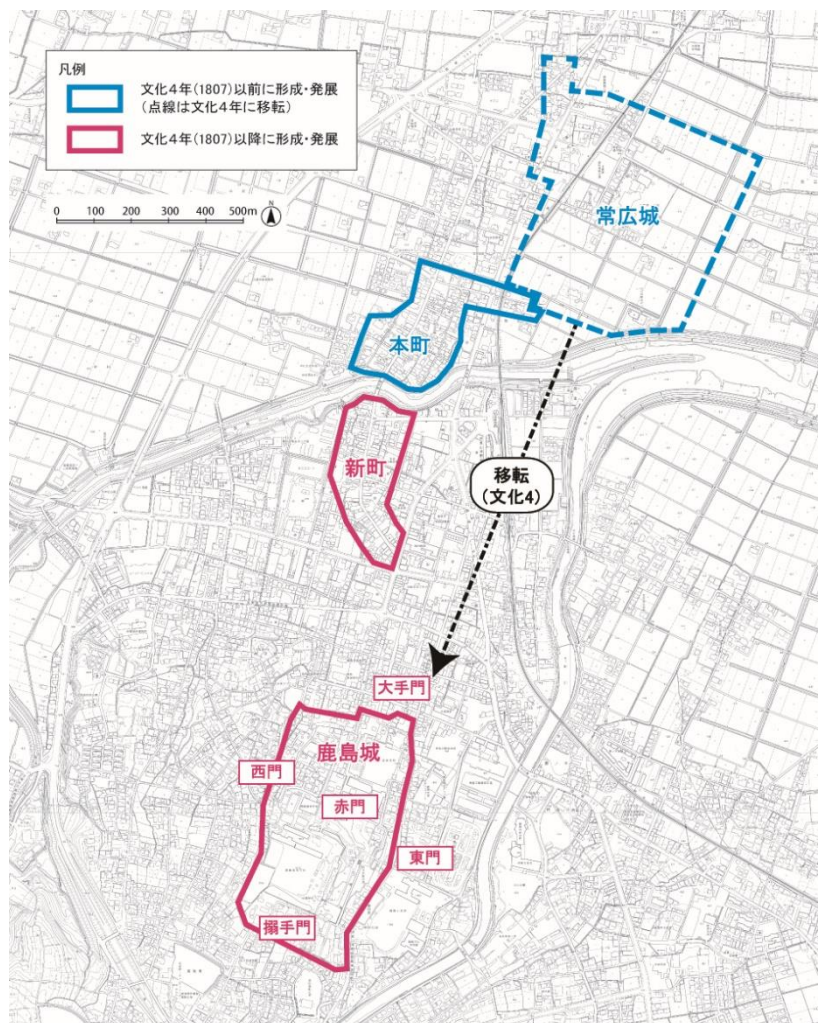
代	名前	備考	代	名前	備考
初代	ただしげ 忠茂	徳川幕府で勤きが認められる	9代	なおのり 直彝	鹿島城へ居城を移す
2代	まさしげ 正茂				夫人篤子が鹿島錦を発明
3代	なおとも 直朝	干拓、治水事業に注力	10代	なおなが 直永	
		夫人萬子が祐徳稻荷神社勧請	11代	なおはる 直晴	
4代	なおえだ 直條	『鹿島志』『楓園家塵』等著	12代	なおきが 直賢	
5代	さおかた 直堅		13代	なおよし 直彬	『綱堂遺稿』等著
6代	なおさと 直郷	『西園和歌集』等著	14代	なおただ 直縄	
7代	なおひろ 直熙		15代	なおつぐ 直紹	
8代	なおよし 直宜				

②江戸中期・後期：町場の形成と発展

ア 鹿島城城下町の形成

社会が発展していく中で、次第に浜町や北鹿島本町、鹿島中牟田（現在の Newtown）、能古見辻などにはまとまった町場が形成され、商業が盛んになっていった。

鹿島藩の城は北鹿島の常広の地（現在の北鹿島小学校の位置）にあり、常広城と呼ばれていたが、土地が低く、度々水害を被っていた。そのため、9代藩主直彝の時に城を移転することとなり、文化4年（1807）、高津原（現在の鹿島高等学校の位置）に新城が完成した。城は高津原屋敷・鹿島館などと呼ばれ、石垣や土塁、堀に囲まれ、本丸の門は通称赤門と呼ばれた。大手門から本丸にかけては稲妻型の道が続き、周囲には家臣の屋敷が広がっていた。



図：鹿島城下の町場（『佐賀県の中近世城屋館』（2014）を基に作成）

イ 肥前浜宿と多良海道の整備

長崎街道には、塩田通り道筋、塚崎回りの^{そのぎ}彼杵通り道筋、多良通り道筋（多良海道）の3つのルートがあった。長崎街道が開通したのは慶長14年（1609）であったが、多良海道は慶安5年（1652）には整備されていたようである。

有明海の西岸を通る多良海道（多良道、長崎脇街道、浜道ともいった）は、塩田宿で分岐し、鹿島、浜宿、^{やごたえ}矢答、^{さざんか}多良、^{ゆえ}山茶花、^{いさはや}湯江、諫早を経て長崎へ至る道である。

佐賀藩は1年おきに長崎警固番役の任を務める必要があったため、佐賀と長崎との往来の際は、海路とともに、多良海道をしばしば利用していた。

多良海道沿いの最も大きな宿場町であったのが浜宿であり、有明海に面した港町でもあったことから、陸路と海路の接点として栄え、「浜千軒」と呼ばれるほどの賑わいを見せていた。浜宿に鹿島藩領における宿駅機能が集結されるようになると、^{つぎぼ}継場、^{じょうしや}上使屋（お茶屋）、^{こうきつぼ}高札場、番所などの施設が整備された。『肥前濱町史』（1998）には、幕府の巡検使や大名が浜宿に宿泊する際には総勢800人になることもあり、上使屋だけでは収容しきれず、近くの寺院などにも分散して宿泊していたようであることが記されている。また、浜宿には、スペインのキリスト教団のドミニコ会によって教会が建てられ、布教活動が行われていた。



図：長崎街道要図（『鹿島市史』を基に一部加工）

ウ 祐徳稲荷神社の信仰

鹿島3代藩主鍋島直朝夫人の萬子^{まんこ}は、直朝に嫁ぐ折、父である左大臣花山院定好^{かざんいんさだよし}より花山院邸内に祀られていた稲荷大神の御分霊を神鏡に遷して授けられたといわれている。貞享4年(1687)、現在の祐徳稲荷神社の地に建てられた石壁山祐徳院に萬子が入寺する際、この稲荷大神の分霊を寺内社に勧請したことが祐徳稲荷神社の創建の由来であると伝わる。萬子はその後19年間神仏に奉仕し、宝永2年(1705)、石壁山に壽藏^{じゆうざう}を築き、入寂^{にゅうじやく}した。祐徳稲荷神社は、その後も江戸時代を通じて、代々鍋島家によって篤く信仰されていく。

江戸後期頃からは本来の農業神としてだけでなく、商業や漁業の神としても祭祀され、広く民衆の信仰を集めるようになった。鹿島新町の稲荷社をはじめ、鹿島地方には各地に稲荷神が祀られているように、稲荷神信仰が盛んであった。『鹿島市史』(1974)によれば、これに、全国的な寺社参拝の風潮を反映して、江戸後期頃に祐徳稲荷神社への参拝者が増加し、門前町が形成されたと推察されている。



図：近世に関わる建造物と土地利用

4) 近代・現代：近代化による発展

ア 町村編成と鹿島市の誕生

江戸時代、現在の鹿島市の区域には 80 以上の郷村があったとされ、幕末から明治初期にかけては 3 町、62 村があったとされる。

明治 4 年（1871）の廃藩置県以後、地方制度が整備され、現在の大字単位として残る 13 村に集約された。また、肥前国や佐賀藩はなくなり、現在の鹿島市が属する県は明治 4 年（1871）7 月～11 月鹿島県、その後、伊万里県、佐賀県、三潴^{みずま}県、長崎県を経て、明治 16 年（1883）5 月から現在の佐賀県と、短期間にめまぐるしく変化した。

明治 21 年（1888）、市制・町村制が公布され、翌 22 年（1889）には旧村を統合し、南鹿島村、北鹿島村、能古見村、古枝村、八本木村、七浦村の 6 村が誕生した。その後、大正元年（1912）には南鹿島村が鹿島町となり、これに伴い、北鹿島村は鹿島村となった。さらに大正 7 年（1918）には八本木村が浜町となった。

昭和 28 年（1953）に施行された町村合併促進法を受けて、翌昭和 29 年（1954）、鹿島町、浜町、能古見村、古枝村、鹿島村の 5 ヶ町村を合併し、鹿島市が誕生した。その後、昭和 30 年（1955）に伊福^{いふく}地区を除いた七浦村を編入し、今日の鹿島市となった。

イ 鹿島城の焼失と高校としての整備

明治 7 年（1874）、征韓論に敗れて下野した前参議の江藤新平^{えとうしんぺい}らが起こした佐賀の乱の際、この反乱に呼応した鹿島の旧藩士の一部は鹿島城が官軍に占領されるのを恐れて自ら火を放った。これにより、鹿島城は赤門と倉庫 1 棟を除き焼失してしまった。

鹿島城の跡地には、明治 29 年（1896）に佐賀県尋常中学校鹿島分校が建設された。これは後に、鹿島中学校となり、昭和 23 年（1948）に鹿島高等女学校、鹿島農商学校とともに統合し、佐賀県立鹿島高等学校となった。その後、昭和 30 年（1955）に鹿島実業高等学校が分離独立した。

鹿島城の赤門は現在、県立鹿島高等学校の校門となっている。昭和 15 年（1940）に棟札を発見したことを記念し、毎年 9 月に「赤門祭」と称した文化祭が行われている。

平成 30 年（2018）には、昭和 30 年（1955）に分離独立した鹿島実業高等学校が、約 60 年ぶりに再び統合し、新しい鹿島高等学校として開校された。



写真：赤門

ウ 交通の近代化

明治 37 年 (1904)、祐徳稲荷神社門前から石木津、中川、新町、本町、乙丸、塩田を經由し、武雄^{たけお}までの 22.5km を約 2 時間かけて走行する祐徳馬車鉄道 (以下、「祐徳軌道」) が開通した。その後、動力として馬の代わりに石油発動車 (石油を燃料とした発動機が動力源で、蒸気機関車に似た外観をしている) が使われ始め、次いで、蒸気機関車に代わった。これにより、鹿島は城下町としてだけではなく、県西南部地域の商業中心地としても発展していく。

昭和 2 年 (1927) には、百貫橋^{ひゃっかん}が開通し、昭和 5 年 (1930) には鉄道の有明線 (長崎本線) が開通し、肥前浜駅、肥前鹿島駅が建設された。さらに昭和 9 年 (1934) には肥前七浦駅も建設された。同年には浜大橋も開通して、今日の国道 207 号は佐賀～長崎を結ぶ主要な道路としての役割を果たすようになった。同じころ、乗り合いバスも普及し、この頃には、祐徳軌道は役目を終え、廃止された。



写真：石油発動車



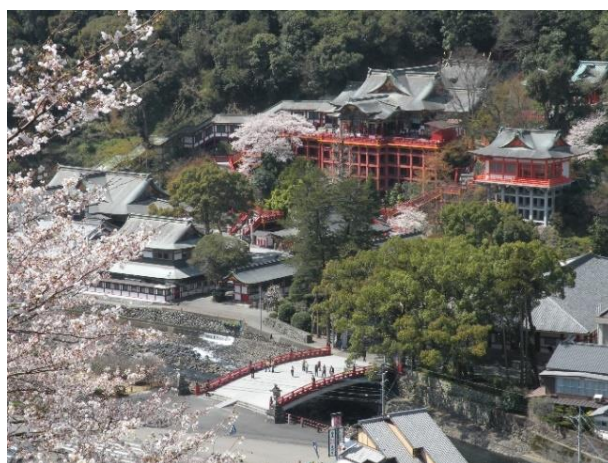
写真：建設中の長崎本線

(出典：『鹿島市五十年のあゆみ市制 50 周年記念誌』)

エ 祐徳稲荷神社参詣の拡大

従来黄檗^{おうぼくしゅう}宗の寺院で祐徳院と呼ばれていた祐徳稲荷神社は、明治 4 年 (1871)、神仏分離令によって、仏像や仏具を普明^{ふみょう}寺に移し、寺号を祐徳稲荷神社と改め、明治 10 年県社となった。

大正末期から昭和初期にかけて社殿や社務所の大改装工事が行われたものの、昭和 24 年 (1949) の火災によって社殿建物のほとんどが焼失した。しかし、地元有志等によって、昭和 32 年 (1957) に本殿が再建、昭和 41 年 (1966) に神楽殿^{かぐらでん}が竣工した。その後も十年毎の式年大祭の記念として神社施設の整備拡充が行われている。



写真：祐徳稲荷神社

オ 干潟漁業の発展

明治期に入ると漁業を営む人が次第に増加していったとされる。

それまでは網漁業を中心としていたが、この時期は、養殖漁業も発展する。カキ（スミノエカキ）の養殖事業は万延年間（1860）頃に開始されたが、改良を重ね大正時代に最盛期を迎えた。また、明治期以降はアサリやアゲマキ、海苔の養殖も行われ、昭和15年（1940）から昭和16年（1941）頃には、シカメカキの養殖が最盛期を迎えた。しかし、昭和期に入り、カキ、アサリやアゲマキは水質の変化などにより生産性を維持することができなくなり、徐々に衰退していった。一方、海苔養殖は技術の改善によって発展した（『鹿島市五十年のあゆみ市制50周年記念誌』（2004）より）。本市における平成29年（2017）の海苔生産量は、約2億枚であり、海苔は本市の特産品の一つとなっている。

また、有明海沿岸で生産される「佐賀海苔」の生産量は平成15年（2003）から平成29年（2017）の15年連続全国1位となっている（農林水産省HP「平成15年～平成29年漁業・養殖業生産統計」より）。

カ 農業の近代化

『鹿島市史』（1974）によれば、終戦直後は神社境内、学校の校舎間の空地、道路脇、河川の堤防など、作物が栽培されそうな所は余すことなく耕されたとあり、また、昭和20年（1945）から山間地の開拓が始まったともある。佐賀県が昭和31年（1956）に農業基本調査を実施した報告からは、七浦、能古見、古枝の林野を普通畑として開いたのが中心であり、北鹿島では開拓地が見られないとも述べられている。

昭和35年（1960）以降、本格的なミカン園の造成が開始され、昭和39年（1964）からは、国営多良岳開拓パイロット事業が行われ、その後、ミカンと米が本市の農業を支える2本の柱となっている。



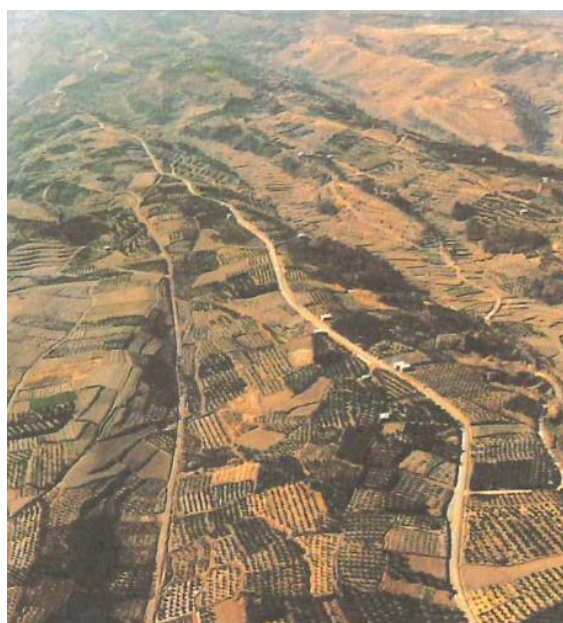
写真：海苔養殖の様子

（出典：『鹿島市五十年のあゆみ市制50周年記念誌』）



写真：海苔養殖場

（出典：『鹿島市五十年のあゆみ市制50周年記念誌』）



ただけ

写真：多良岳開拓パイロット事業

（出典：『鹿島市五十年のあゆみ市制50周年記念誌』）

キ 肥前浜宿の町並み整備

平成8年（1996）、浜中町八本木宿の通称「酒蔵通り」に残る古い建造物群を保存しようと、浜町に暮らす人々による「まちなみ保存会活動」が始まった。平成9年（1997）には、「肥前浜宿まちなみ保存研究会」が発足し、浜町振興会の「まちなみ部会」として、セミナー、先進地視察、イベントを開催した。「まちなみ部会」は平成12年（2000）に「肥前浜宿水とまちなみの会」として新しく発足（『鹿島市五十年のあゆみ市制50周年記念誌』（2004）より）、平成17年（2005）にはNPO法人化し、現在も肥前浜宿のまちづくり活動を続けている。

平成15年（2003）には、長崎街道を行き来する人々のための「^{つぎば}継場※」の修理が行われ、伝統的な建造物の公開活動が始まった。このようなまちなみの保存活動が進む中、平成18年（2006）には、草葺屋根の町家が立ち並ぶ、「浜庄津町浜金屋町」と、白壁土蔵の町並みが特徴的な「浜中町八本木宿」の2地区が重要伝統的建造物群保存地区に選定され、それ以降も町並みの修理・修景や活用に関する活動が進められている。

平成23年（2011）には市内の酒蔵を中心とした、「鹿島酒蔵ツーリズム推進協議会」が設立され、平成24年（2012）以降、毎年「鹿島酒蔵ツーリズム®」を開催している。

まちなみ保存活動が始まった当時の肥前浜宿には、今にも崩れ落ちそうな古い建造物群が立ち並び、観光客の姿など見られなかったが、20年以上にわたる地元主体のまちづくり活動が、まちなみに往時の輝きを取り戻し、現在では、多くの観光客が肥前浜宿の伝統的なまちなみと、特産品である日本酒を楽しんでいる。

※「継場」…江戸時代、街道の宿場に置かれた旅人の荷物等を次の宿場へ中継する間屋。

平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度
<ul style="list-style-type: none"> ○ 各事業の案内の発信と通信連絡のための携帯HP作成 ○ 情報発信携帯ホームページ作成 ○ 副断面への植栽 ○ 浜川景観美化活動 ○ 浜川景観ホール、鹿島にわか、大道芸、劇団等 ○ 肥前浜宿まちなみミュージアム ○ シンポジウムや体験学習、文化教室、展示会、茶会の開催 ○ 乗田家住宅保存活用事業 ○ 浜宿より浜川沿いを祐徳稲荷神社、普明寺への8キロのウォークを実施 ○ 肥前浜宿ウォーク ○ 現地研修 ○ 鹿島市歴史について ○ ボランティアガイド育成講座 ○ 街角美術館・酒蔵美術館 ○ 肥前浜宿一円のスケッチ ○ 肥前浜宿スケッチ大会 ○ 文化教室、英会話、折り鶴、生花、舞踊教室 ○ 花と酒まつり、こども生け花展、野点 ○ 完工記念祭 ○ 旧乗田家住宅保存活用事業 ○ 観る、歩く、食す、肥前浜宿ウォーク ○ 肥前浜宿ウォーク ○ パネルディスカッション「肥前浜宿選定とこれから」 ○ 記念講演 九州大学教授 宮本雅明氏「浜町と八本木宿の町並み」 ○ 町並みウォッチング ○ 重伝建選定記念シンポジウム ○ 実地研修（浜宿ウォーク）終了式 ○ 講義、肥前浜宿について ○ 開講式、実地研修、浜宿ウォッチング ○ ボランティアガイド育成講座 講師 加田隆志氏（鹿島市前文化財担当） ○ 花と酒まつり ○ 前夜祭 ○ 第5回花と酒まつり ○ こどもスタンプラリ ○ のんびりコース5キロ・いきいきコース8キロ ○ 観る、歩く、食す、肥前浜宿ウォーク ○ 先進地視察、別府八湯ウォーク、白杵まちなみ ○ 肥前浜宿まちづくりコンサート ○ 梯剛之ピアノリサイタル 呉竹酒造東蔵 ○ ボランティアガイド育成講座 講師 迎昭典氏（鹿島市前教育長） ○ 竹灯籠を活用した浜川の演出 ○ 浜川河川生物の採集と観察 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 各事業の案内の発信と通信連絡のための携帯HP作成 ○ 情報発信携帯ホームページ作成 ○ 副断面への植栽 ○ 浜川景観美化活動 ○ 浜川景観ホール、鹿島にわか、大道芸、劇団等 ○ 肥前浜宿まちなみミュージアム ○ シンポジウムや体験学習、文化教室、展示会、茶会の開催 ○ 乗田家住宅保存活用事業 ○ 浜宿より浜川沿いを祐徳稲荷神社、普明寺への8キロのウォークを実施 ○ 肥前浜宿ウォーク ○ 現地研修 ○ 鹿島市歴史について ○ ボランティアガイド育成講座 ○ 街角美術館・酒蔵美術館 ○ 肥前浜宿一円のスケッチ ○ 肥前浜宿スケッチ大会 ○ 文化教室、英会話、折り鶴、生花、舞踊教室 ○ 花と酒まつり、こども生け花展、野点 ○ 完工記念祭 ○ 旧乗田家住宅保存活用事業 ○ 観る、歩く、食す、肥前浜宿ウォーク ○ 肥前浜宿ウォーク ○ パネルディスカッション「肥前浜宿選定とこれから」 ○ 記念講演 九州大学教授 宮本雅明氏「浜町と八本木宿の町並み」 ○ 町並みウォッチング ○ 重伝建選定記念シンポジウム ○ 実地研修（浜宿ウォーク）終了式 ○ 講義、肥前浜宿について ○ 開講式、実地研修、浜宿ウォッチング ○ ボランティアガイド育成講座 講師 加田隆志氏（鹿島市前文化財担当） ○ 花と酒まつり ○ 前夜祭 ○ 第5回花と酒まつり ○ こどもスタンプラリ ○ のんびりコース5キロ・いきいきコース8キロ ○ 観る、歩く、食す、肥前浜宿ウォーク ○ 先進地視察、別府八湯ウォーク、白杵まちなみ ○ 肥前浜宿まちづくりコンサート ○ 梯剛之ピアノリサイタル 呉竹酒造東蔵 ○ ボランティアガイド育成講座 講師 迎昭典氏（鹿島市前教育長） ○ 竹灯籠を活用した浜川の演出 ○ 浜川河川生物の採集と観察 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 各事業の案内の発信と通信連絡のための携帯HP作成 ○ 情報発信携帯ホームページ作成 ○ 副断面への植栽 ○ 浜川景観美化活動 ○ 浜川景観ホール、鹿島にわか、大道芸、劇団等 ○ 肥前浜宿まちなみミュージアム ○ シンポジウムや体験学習、文化教室、展示会、茶会の開催 ○ 乗田家住宅保存活用事業 ○ 浜宿より浜川沿いを祐徳稲荷神社、普明寺への8キロのウォークを実施 ○ 肥前浜宿ウォーク ○ 現地研修 ○ 鹿島市歴史について ○ ボランティアガイド育成講座 ○ 街角美術館・酒蔵美術館 ○ 肥前浜宿一円のスケッチ ○ 肥前浜宿スケッチ大会 ○ 文化教室、英会話、折り鶴、生花、舞踊教室 ○ 花と酒まつり、こども生け花展、野点 ○ 完工記念祭 ○ 旧乗田家住宅保存活用事業 ○ 観る、歩く、食す、肥前浜宿ウォーク ○ 肥前浜宿ウォーク ○ パネルディスカッション「肥前浜宿選定とこれから」 ○ 記念講演 九州大学教授 宮本雅明氏「浜町と八本木宿の町並み」 ○ 町並みウォッチング ○ 重伝建選定記念シンポジウム ○ 実地研修（浜宿ウォーク）終了式 ○ 講義、肥前浜宿について ○ 開講式、実地研修、浜宿ウォッチング ○ ボランティアガイド育成講座 講師 加田隆志氏（鹿島市前文化財担当） ○ 花と酒まつり ○ 前夜祭 ○ 第5回花と酒まつり ○ こどもスタンプラリ ○ のんびりコース5キロ・いきいきコース8キロ ○ 観る、歩く、食す、肥前浜宿ウォーク ○ 先進地視察、別府八湯ウォーク、白杵まちなみ ○ 肥前浜宿まちづくりコンサート ○ 梯剛之ピアノリサイタル 呉竹酒造東蔵 ○ ボランティアガイド育成講座 講師 迎昭典氏（鹿島市前教育長） ○ 竹灯籠を活用した浜川の演出 ○ 浜川河川生物の採集と観察

図 肥前浜宿水とまちなみの会の主な活動（平成17年（2005）度～平成19年（2007）度）

（『まちづくり活動支援事例集：佐賀県』より転載）



図：近代～現在の土地利用

(2) 関わりのある主な人物

1) 覚鑿 (1095～1143)

真言宗中興の祖であり、新義真言宗の始祖とされる高僧である。現鹿島市行成の誕生院が生誕の地とされる。

13歳で京都の仁和寺で真言宗の教えを学び、出家後は紀州高野山に上り、大伝法院の再建を行うなど、当時衰退していた高野山の復興事業を行った。



写真：覚鑿

(出典：『鹿島の人物誌』)

2) 雲谷等顔 (1547～1618)

能古見原城主の一族で、後に毛利輝元もうりてるもとに召し抱えられた、桃山時代の画家。肥前国藤津郡能古見原城主、原豊後守直家はらぶんごのかみなおいえの二男として生まれた。雪舟せつしゅうゆかりの雲谷庵うんこくあんを与えられ、雪舟の正統な後継者と名乗った。雲谷派の祖である。

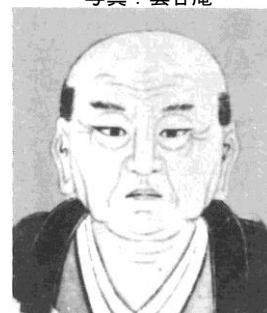


写真：雲谷庵

3) 鍋島直朝 (1622～1709)

鹿島鍋島藩第三代藩主である。佐賀城にて佐賀藩初代藩主鍋島勝茂の第五子として生まれ、寛永13年(1636)、鹿島藩主の鍋島正茂まさしげの養子となる。そして寛永19年(1642)、佐賀藩主より鹿島藩主に任命される。

藩内の山野の開発や灌漑事業に注力し、干拓も多く手掛けるなど、鹿島市の基礎を築いた人物である。市内各地にある思瓊神社おもには直朝を祭神として祀ったものである。



写真：鍋島直朝

(出典：『鹿島の人物誌』)

4) 鍋島直朝夫人 萬子 (1626～1705)

花山院定好の娘で、鹿島藩三代藩主鍋島直朝の継室となった人物。後年、京都から勧請した稻荷大神の分霊を古枝の祐徳院に祀り、これが現在の祐徳稻荷神社の由来となった。

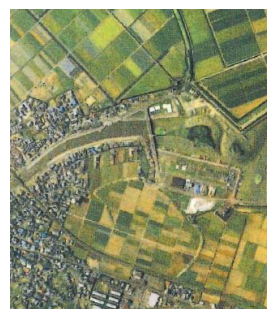
石壁山に寿蔵を構築させ、断食の行を積み、国家の安泰を祈願して入定した。後に石壁社に祀られたが、法名「祐徳院瑞顔実麟ゆうとくいんずいがんじつりん大師たいし」から同社を祐徳稻荷神社と称するようになった。



写真：直朝夫人 萬子

5) 平尾水月 (1668～1753)

鹿島三代藩主鍋島直朝に仕えた鹿島藩士。開拓、干拓事業に尽力した。晩年、『断続起廢政務方御吟味希書だんぞくきはいせいむかたおぎんみきしよ』を著し、度重なる天災など苦心した干拓事業の詳細を後世に伝えている。



写真：干拓

(出典：『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』)

6) 鍋島直彝夫人 篤子 (1798～1877)

鹿島藩9代藩主鍋島直彝の正室であり、鹿島錦 (佐賀錦) を考案したとされる人物。小城藩主鍋島加賀守直愈の娘。

病床にあった際、天井の網代文様にヒントを得て、紙捻を組んで織り、印籠などを作ったのが鹿島錦の始まりと言われている。



写真：鹿島錦

(出典：『鹿島市の文化財
～ふるさと歴史探訪～』)

7) 鍋島直彬 (1843～1915)

鹿島藩最後 (13代) の藩主である。藩政を改革し、文武の奨励、人材育成に注力した人物で、明治維新後は天皇家侍従、初代沖縄県令、貴族院議員などを務めた。

「衆楽園」で催した観桜の宴は、現在の旭ヶ岡公園の花見行事の始まりとなった。



写真：鍋島直彬

(出典：『鹿島の人物誌』)

8) 尾崎天風 (1886～1960)

古枝中尾に生まれ、軍役後、上京して報知新聞の記者となる。そのころ入手した北海道の森林が、関東大震災後の木材市況の活発化を受けたことによって、財を成した。昭和7年 (1931) に衆議院議員となり、北海道北見を拠点に政治活動に専念した。

しかし、郷土愛は篤く、特に肥前浜駅開設に尽力したと伝わる。長崎本線開通に伴い、肥前浜駅設置の要望が強まる中、肥前鹿島駅との間があまりに短いという理由から難渋していた折、記者時代から親交のあった時の鉄道大臣小川平吉に、地元民の強い要望をうけ直談判し、実現に至ったという。



写真：尾崎天風

4 文化財等の分布及び特徴

(1) 文化財等の件数

本市には国選定の重要伝統的建造物群保存地区が2地区あり、歴史的町並みが良好に残っている。

また、市内には国指定文化財が、有形文化財（美術工芸品）1件、無形文化財（演劇、音楽、工芸技術等）1件、記念物（動物、植物、地質鉱物）1件の計3件所在し、国登録有形文化財（建造物）が8件所在している。

県指定文化財は、有形文化財（建造物）2件、（美術工芸品）9件、民俗文化財（無形の民俗文化財）3件、記念物（遺跡）1件の計15件所在する。

市指定文化財は、有形文化財（建造物）2件、（美術工芸品）18件、民俗文化財（無形の民俗文化財）1件、記念物（遺跡）2件、（動物、植物、地質鉱物）1件の計24件所在している。

また、佐賀県には県内の市町等からの申請に基づき、有識者等からなる「佐賀県美しい景観づくり審議会」の審議を経て、認定される「22世紀に残す佐賀県遺産」がある。

「22世紀に残す佐賀県遺産」の認定対象は、下記のいずれかに該当し、その保全又は活用に取り組まれているものである。

- ①自然と人間がつくりあげたものが調和し、歴史や風土など佐賀県ならではの個性と魅力を感じさせる一団の地区。
- ②自然景観、歴史景観、農山漁村景観、産業景観、眺望景観が美しい地区。
- ③文化的に高い価値を有する建造物又は、景観上重要な建造物。

「22世紀に残す佐賀県遺産」の認定遺産のそれぞれに、次の世代、22世紀まで残していきたいという県民の想いが詰まった物語がある。本市においては中島酒造場、なかしま光武酒造場、みつたけ矢野酒造、馬場酒造場の4件が認定されている。

表：鹿島市の指定等文化財の件数

類型		国指定	国選定	国登録	県指定	市指定	合計
有形文化財	建造物	-	-	8	2	2	12
	美術工芸品	1	-	-	9	18	28
無形文化財	演劇、音楽、工芸技術等	1	-	-	-	-	1
民俗文化財	無形の民俗文化財	-	-	-	3	1	4
記念物	遺跡	-	-	-	1	2	3
	動物、植物、地質鉱物	1	-	-	-	1	2
伝統的建造物群		-	2	-	-	-	2
合計		3	2	8	15	24	52

表：指定等文化財一覧

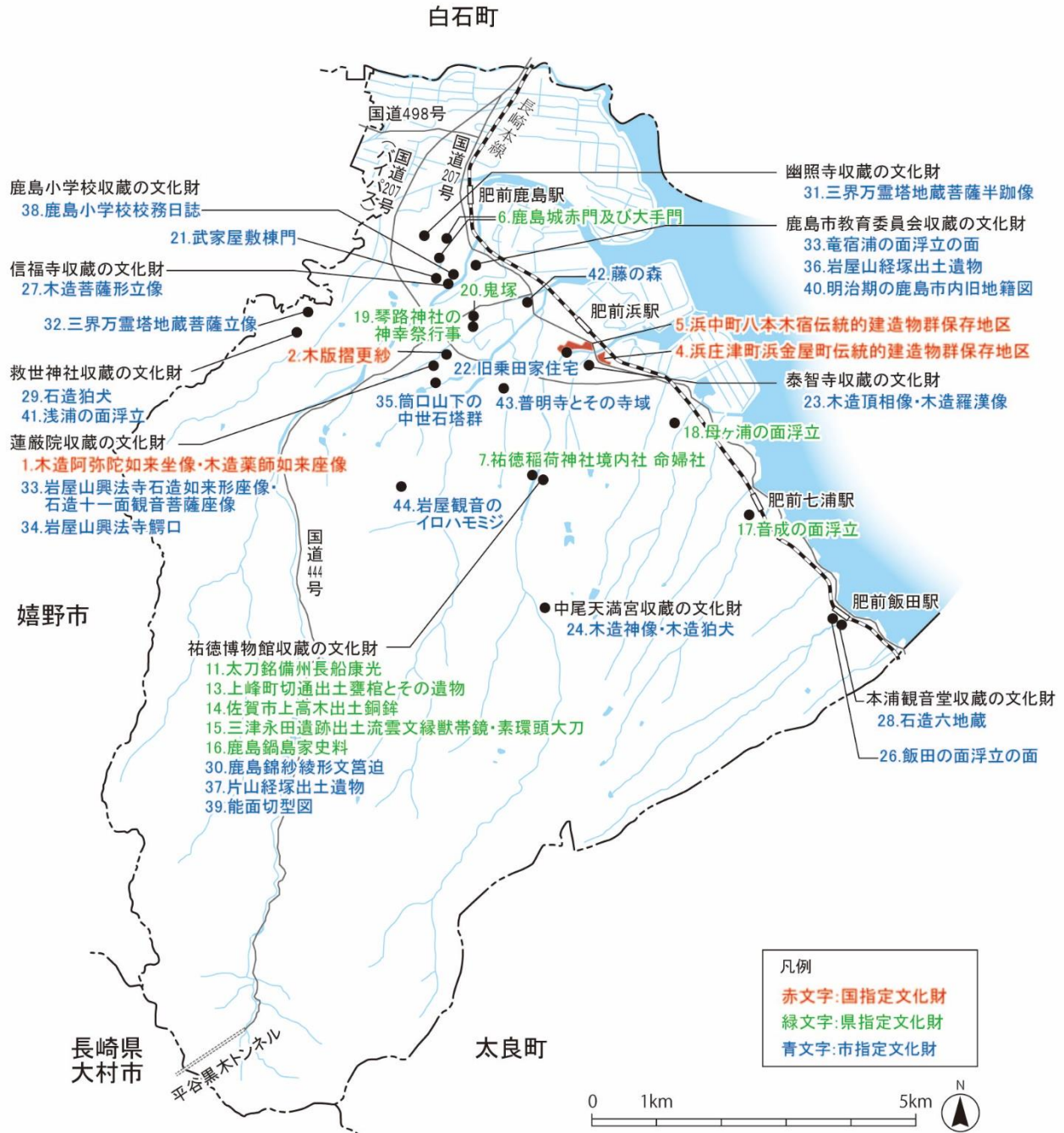
主体	種別		名称
1 国	有形文化財	美術工芸品	木造阿弥陀如来坐像（2 軀）・木造薬師如来坐像（1 軀）
2 国	無形文化財	演劇、音楽、 工芸技術等	木版摺更紗（重要無形文化財（各個認定）保持者：鈴木滋人）
3 国	記念物	動物、植物、 地質鉱物	カササギ生息地
4 国	伝統的建造物群		鹿島市浜庄津町浜金屋町伝統的建造物群保存地区
5 国	伝統的建造物群		鹿島市浜中町八本木宿伝統的建造物群保存地区
6 県	有形文化財	建造物	鹿島城赤門及び大手門（2 棟）
7 県	有形文化財	建造物	祐徳稻荷神社境内社 命婦社（1 棟）
8 県	有形文化財	美術工芸品	絹本着色八文字殊菩薩騎獅図（1 幅）
9 県	有形文化財	美術工芸品	銅造菩薩形坐像（1 軀）
10 県	有形文化財	美術工芸品	刀 大磨上 無銘 伝行光（1 口）
11 県	有形文化財	美術工芸品	太刀 銘 備州長船康光 應永卅年三月日（1 口）
12 県	有形文化財	美術工芸品	五鈷四天王鈴（1 口）
13 県	有形文化財	美術工芸品	上峰町切通出土甕棺とその遺物（一括）
14 県	有形文化財	美術工芸品	佐賀市上高木出土銅鉞（1 口）
15 県	有形文化財	美術工芸品	三津永田遺跡出土流雲文縁獣帯鏡（1 面）素環頭大刀（1 口）
16 県	有形文化財	美術工芸品	鹿島鍋島家史料（857 点）
17 県	民俗文化財	無形の民俗文化財	音成の面浮立 ※国の記録選択
18 県	民俗文化財	無形の民俗文化財	母ヶ浦の面浮立
19 県	民俗文化財	無形の民俗文化財	琴路神社の神幸祭行事
20 県	記念物	遺跡	鬼塚
21 市	有形文化財	建造物	武家屋敷棟門（1 棟）
22 市	有形文化財	建造物	旧乗田家住宅（1 棟）

	主体	種別		名称
23	市	有形文化財	美術工芸品	木造頂相造（1 軀）・木造羅漢造（16 軀）
24	市	有形文化財	美術工芸品	木造神像（1 対）・木造狛犬（1 対）
25	市	有形文化財	美術工芸品	竜宿浦の面浮立の面（1 対）
26	市	有形文化財	美術工芸品	飯田の面浮立の面（1 面）
27	市	有形文化財	美術工芸品	木造菩薩形立像（1 軀）
28	市	有形文化財	美術工芸品	石造六地藏（1 基）
29	市	有形文化財	美術工芸品	石造狛犬（1 対）
30	市	有形文化財	美術工芸品	鹿島綿 紗綾形文 筥迫（1 点）
31	市	有形文化財	美術工芸品	三界万霊塔地藏菩薩半跏像（1 軀）
32	市	有形文化財	美術工芸品	三界万霊塔地藏菩薩立像（1 軀）
33	市	有形文化財	美術工芸品	岩屋山興法寺 石造如来形座像（2 軀）・ 石造十一面観音菩薩座像（1 軀）
34	市	有形文化財	美術工芸品	岩屋山興法寺 鰐口（1 1 個）
35	市	有形文化財	美術工芸品	筒口山下の中世石塔群（一括）
36	市	有形文化財	美術工芸品	岩屋山経塚出土遺物（経筒 1 個・外筒 1 個・紙本经文 1 巻）
37	市	有形文化財	美術工芸品	片山経塚出土遺物 （経筒 4 個・外筒 1 個・鉄製剣 1 口・鉄製刀 1 口）
38	市	有形文化財	美術工芸品	鹿島市小学校校務日誌 明治 17 年～昭和 63 年（全 103 冊）
39	市	有形文化財	美術工芸品	能面切型図（1 巻）
40	市	有形文化財	美術工芸品	明治期の鹿島市内旧地籍図（793 枚）
41	市	民俗文化財	無形の民俗文化財	浅浦の面浮立
42	市	記念物	遺跡	藤の森
43	市	記念物	遺跡	普明寺とその寺域
44	市	記念物	動物、植物、 地質鉱物	岩屋観音のイロハモミジ（1 本）

※音成の面浮立は「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」として選択され、国からの助成を受け記録作成（調査報告書『音成の面浮立』（1979））を行っている。

表：登録文化財一覧

	主体	種別		名称
1	国	有形文化財	建造物	富久千代酒造（一号蔵・精米所・麴室）
2	国	有形文化財	建造物	肥前浜宿 継場（主屋）
3	国	有形文化財	建造物	呉竹酒造（主屋・一番蔵・東の蔵）
4	国	有形文化財	建造物	矢野酒造（主屋・離れ・旧精米所・東蔵・中蔵・西蔵・麴室）
5	国	有形文化財	建造物	飯盛酒造（主屋・一号蔵及び二号蔵・三号蔵・麴室・煙突）
6	国	有形文化財	建造物	中島酒造場（主屋・仕込蔵・西蔵・麴室・土蔵）
7	国	有形文化財	建造物	旧中島政次家住宅（主屋）
8	国	有形文化財	建造物	吉田家住宅（主屋・土蔵）



図：指定文化財の分布

(2) 主な文化財の概要

1) 国指定等文化財

ア 重要無形文化財：演劇、音楽、工芸技術等

＜木版摺更紗＞ もくはんずりさらさ

(保持者：すずたしげと 鈴木滋人)

木版摺更紗は木版と型紙を併用する独特の技法である。佐賀鍋島藩の保護の下、継承され、製品は献上品や贈答品として用いられたが、近代に入り、途絶えていた。しかし、故・鈴木照次氏すずたてるじによって昭和40年代に復元され、その子、鈴木滋人氏がそれを引き継ぎ、技法を高度に体得するとともに、独自の作風を確立した。これにより、平成20年(2008)9月に木版摺更紗は無形文化財に指定され、鈴木滋人氏が重要無形文化財(各個認定)保持者(いわゆる人間国宝)として認定された。



写真：木版摺更紗

(出典：『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』)

イ 天然記念物：動物、植物、地質鉱物

＜カササギ生息地＞

カラス科のカササギは佐賀県の県鳥である。国内での生息地は主に佐賀平野と中心とする地域に限られており、唐津・伊万里市からつ いまりと東松浦郡を除く佐賀県内と福岡県の一部が天然記念物に指定されている。



写真：カササギ

(出典：『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』)

ウ 重要伝統的建造物群保存地区：伝統的建造物群

<浜庄津町浜金屋町>

浜庄津町浜金屋町は浜川河口の右岸に位置する港町、在郷町である。『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』（2009）によれば、町の成立は中世に^{さかのぼ}り、有明海沿岸の干拓事業や浜川護岸整備によって早くから陸地化し、後に多良海道と浜川が交わるあたりに船着場が設けられ、この船着場を中心に町が成立した可能性が高いとされている。

江戸時代には、多良海道が通り、鹿島藩の外港としての機能を担ったことから、陸路と水上交通の両面で重要な拠点となった。また、さまざまな職業の人々が混在して居住したとされ、特に浜庄津町では商人、浜金屋町では鍛冶屋や左官屋といった職人が暮らし、大いに賑わったと伝わる。

現在でも茅葺町家を中心とした歴史的町並みが残る地区であり、平成 18 年（2006）7 月に重要伝統的建造物群保存地区に選定された。



写真：浜庄津町浜金屋町

<浜中町八本木宿>

浜中町八本木宿は浜川の左岸に位置する宿場町である。『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』（2009）によれば、中世に活躍した原氏の居城である臥竜城、大村氏、有馬氏の居城である松岡城と、松岡神社や知恩寺などの社寺を核として発展し、近世初頭には町が形成されていたと考えられている。

江戸時代に多良海道が開通すると、鹿島藩の宿場町としての機能が確立され、客屋・高札場、上使屋、継場などが置かれた。また、酒造業が盛んになり、現在でも酒蔵が多く残る。

これに加え、白壁の居蔵造や茅葺町家、洋風建築などが並ぶ歴史的町並みが残り、平成 18 年（2006）7 月に重要伝統的建造物群保存地区に選定された。



写真：浜中町八本木宿

エ 登録有形文化財：建造物

<富久千代酒造（一号蔵・精米所・麴室）>

富久千代酒造は肥前浜駅から南に伸びる市道沿いに位置している。一号蔵は寄棟造、よせむねづくり 棧瓦葺、さんがわら 縦板張りの2階建の建物で、仕込蔵、槽場、倉庫、製品倉庫として用いられている。精米所と麴室は切妻造、ふなき 棧瓦葺、ふなば 木造平屋建の建物である。いずれも大正10年（1921）頃の建築である。



写真：富久千代酒造（一号蔵、精米所、麴室）

<肥前浜宿 継場（主屋）>

浜中町八本木宿伝統的建造物群保存地区内の旧多良海道沿いに位置する。間口4間半の妻入り、2階建の建物である。継場とは、宿場から宿場へ人や荷物を運ぶ飛脚や馬の交代を行うなど、江戸時代の街道の物流拠点となっていた場所である。明治以降は呉服問屋として用いられた。江戸後期頃の建築と伝わっている。



写真：肥前浜宿 継場

<呉竹酒造（主屋・一番蔵・東の蔵）>

浜中町八本木宿伝統的建造物群保存地区内の旧多良海道沿いに位置する。主屋は入母屋造、いりも やづくり 棧瓦葺、妻入、2階建の建物であり、昭和9年（1934）建築である。一番蔵も入母屋造、棧瓦葺、妻入、2階建である。酒蔵であり、作業場、洗米所、釜場があるほか、精米所、麴室が付属する。東の蔵は切妻造、棧瓦葺、平入、2階建で、仕込蔵である。



写真：呉竹酒造（主屋、一番蔵、東の蔵）

<矢野酒造（主屋・離れ・旧精米所・東蔵・中蔵・西蔵・麴室）>

肥前鹿島駅付近の旧多良海道沿いに位置している。主屋は入母屋造、棧瓦葺、2階建で、2階外壁が白漆喰塗りである。明治37年（1904）建築である。このほか、接客用の離れ、平屋建で白漆喰塗りの旧精米所、東蔵、中蔵、西蔵、煉瓦造の麴室がある。

佐賀県が認定する「22世紀に残す佐賀県遺産」にも認定されている。



写真：矢野酒造

<飯盛酒造（主屋・一号蔵及び二号蔵・三号蔵・麴室・煙突）>

浜中町八本木宿伝統的建造物群保存地区内の旧多良海道沿いに位置する。主屋は間口 10 間半の入母屋造、棧瓦葺、2 階建て、東側は塗屋造、西側は真壁造である。さらに土蔵造の一号蔵のほか、二号蔵、三号蔵、煉瓦造の麴室と煙突がある。



写真：飯盛酒造

<中島酒造場（主屋・仕込蔵・西蔵・麴室・土蔵）>

浜中町八本木宿伝統的建造物群保存地区内の旧多良海道沿いに位置する。主屋は塗屋造、2 階建てで明治 18 年（1885）建築の建物である。また、土蔵造の仕込蔵、西蔵、麴室、土蔵がある。

佐賀県が認定する「22 世紀に残す佐賀県遺産」にも認定されている。



写真：中島酒造

<旧中島政次家住宅（主屋）>

中島酒造場の旧多良海道を挟み向かい側に位置している。入母屋造、棧瓦葺、2 階建て、白漆喰の大壁造で明治 27 年（1894）建築とされる。中島家本家から分家した際に建てられたものとされている。



写真：旧中島政次家住宅

<吉田家住宅（主屋・土蔵）>

鹿島川の北側、鹿島城が移転する以前、常広城が用いられた頃の城下町に該当する本町に位置している。居蔵造の主屋と大壁白漆喰塗を基本とした土蔵がある。旧鹿島村（北鹿島）の地主であり、明治以降は貸金業、米穀商として繁栄した吉田家の住宅で、明治 23 年（1890）に建築されたものとされる。



写真：吉田家住宅

（出典：『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』）

2) 県指定文化財

ア 有形文化財：建造物

<鹿島城赤門及び大手門>

鹿島城は文化4年（1807）に常広城から移転して以降、鹿島藩の居城となっていた。明治7年（1874）に起きた火災によってほとんどが焼失したが、赤門と大手門が残っている。

赤門は鹿島城落成の1年後の文化5年（1808）に建てられたもので、現在は県立鹿島高等学校の校門として使用されている。大手門は昭和27年（1952）に現在の丹塗に塗り替えられた。



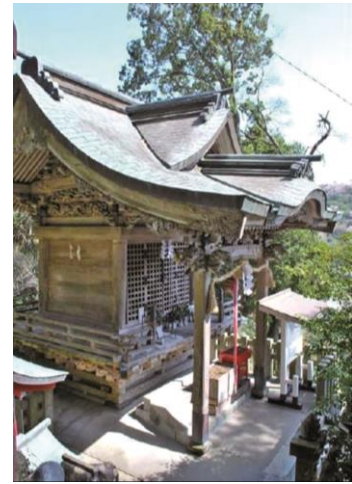
写真：鹿島城赤門

（出典：『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』）

<祐徳稲荷神社境内社 命婦社>

命婦社の社殿は、棟札から享和4年（1804）の建立であり、一間社流れ造で、屋根は切妻造、銅板葺き、正面に千鳥破風、軒に唐破風がついている。

かつては祐徳稲荷神社の本殿であったこの建物は、大正15年（1926）に祐徳稲荷神社が再建された際に、現在の位置に移転された。



写真：祐徳稲荷神社境内社 命婦社

（出典：『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』）

イ 民俗文化財：無形の民俗文化財

<音成の面浮立>

毎年9月第2日曜日に七浦音成の天子神社に奉納される面浮立である。鳥毛、綾竹、笛の役、大太鼓、鉦打ち、モリヤーシ（小太鼓打ち）、かけうち（踊り手）、奉行、頭取が付いて行列を成す。かけうちは濃紺の木綿の襦袢を着て、股引をはき、濃紺のねじり糸の襷をかけ、首に黄色の太鼓吊りを下げ、白紐を腰に巻き固定している。鉦打ちは浴衣を着流しで、下に薄青の前垂をつけ、赤の腰巻の裾を出し、花笠をかぶり、手ぬぐいで口を覆う。衣装、曲目、強く力をこめて足を踏みおろし、力をこめて手を振りかざす所作の違いなどに各地の浮立の特徴が表れる。音成の面浮立は、神前で神仏を楽しませる余興的な要素を持つ曲目が少ないのが特徴的である（『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』（2009））。



写真：音成の面浮立

（出典：『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』）

＜母ヶ浦の面浮立＞

毎年9月第2日曜日に行われる母ヶ浦の鎮守神社の秋祭で奉納される面浮立である。鳥毛、笛の役、大太鼓、かけうちの他、奉行と頭取が付く。かけうちは浪に碇綱模様の法被を着て、紅白のねじり糸の褌がけ、白股引に黒脚絆、白足袋にわらじ履きで、手甲をつける。さらに黄色の布でモリヤーシを腹部につるし、両手にバチを持って、シャグマをつけた鬼面をかぶる。本市を中心として分布する面浮立は、強く力をこめて足を踏みおろし、力をこめて手を振りかざす所作を主体とするものが代表的だが、母ヶ浦の面浮立は踏みこみを主体とすることが特徴的である（『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』（2009））。

＜琴路神社の神幸祭行事＞

毎年11月2日～3日に行われる琴路神社の例大祭である。御神幸行列は獅子舞と剣突き、しめぶり、先払い、神輿の順で巡行し、お供の浮立が後に続き、琴路神社から琴路宮を経て新宮神社へ向かう。

11月3日のお上りの際には、琴路神社境内で「馬かけ神事」も行われる。

ウ 記念物：遺跡

＜鬼塚＞

鬼塚は、中川が造成する行成の扇状地に位置し、市内で唯一、石室が完全に保存されている古墳である。2段築成の円墳で、直径約30m、高さ約5m、横穴式石室を持つ。土師器高坏、須恵器坏、鉄刀、鉄刀子、鉄鏃、ヤリガンナ、馬具などが出土している。

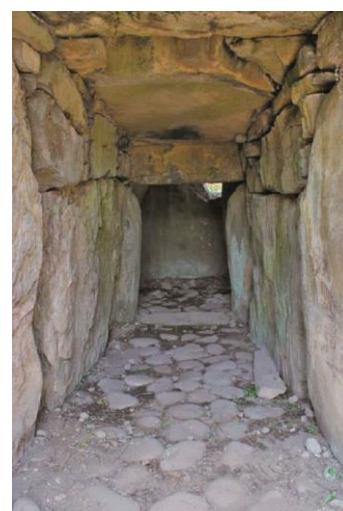


写真：母ヶ浦の面浮立

（出典：『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』）



写真 琴路神社の神幸祭行事



写真：鬼塚

（出典：『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』）

3) 市指定文化財

ア 有形文化財：建造物

<武家屋敷棟門>

鹿島藩の幕末期の家老、原忠順^{はらただゆき}の武家屋敷にある棟門である。昭和60年(1985)に台風によって倒壊したが、その後、修復された。

この棟門には檼^{けやき}が使われており、門の両側には白壁土塀が続いている。



写真：武家屋敷棟門

(出典：『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』)

<旧乗田家住宅>

古枝大村方に位置する、鹿島藩に仕えた武士の住宅である。木造中2階建て、寄棟造、茅葺屋根のクド造(クド(かまど)のようなコの字型をした屋根の形状で、佐賀県に多く見られる。)の建物である。

現在は一般に公開されている。



写真：旧乗田家住宅

(出典：『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』)

<浅浦の面浮立>

毎年9月23日の秋祭で行われる面浮立である。上浅浦の古湯溜池より約5kmの道程を水神、氏神に奉納し、最後に鎮守である救世神社^{くせいじんじや}に奉納する。踏み歩みを主体とする母ヶ浦の面浮立系統に属するといわれている。由来は明確ではないが、古老の話や面や道具の伝世品から江戸時代から伝わるものであると推定されている(『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』(2009))。



写真：浅浦の面浮立

(出典：『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』)

イ 記念物：遺跡

<藤の森>

奈良時代、8世紀初めに編纂された『肥前国風土記』(奈良時代初期)に藤津郡の地名伝説が伝えられている。また、鹿島藩4代藩主鍋島直條^{なお}が記した『鹿島志』(1685)には、「藤の森」と「藤津」を結び付けて、藤津の根源地と伝わっていることが記されており、これを基にして立てられたとされる数基の石塔が残っている(『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』(2009))。



写真：藤の森

(出典：『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』)

<普明寺とその寺域>

普明寺は古枝の久保山^{くぼやま}に位置する禅宗・黄檗宗の寺院である。鹿島藩主鍋島家の菩提寺^{ぼだいじ}で、歴代藩主の墓地を有する。境内には仏堂、禅堂、方丈、鐘楼など17の伽藍^{がらん}が整備されている。中国明朝時代の建築様式が見られ、1300年代の朝鮮半島から伝来した高麗仏の銅像菩薩形坐像^{こうらいぶつ どうぞう ぼさつぎょう ざぞう}（県指定文化財）をはじめ、多くの仏像が収蔵されている。

境内の周囲と裏山は二次的な原生林となっており、多くの動植物が生育していることから、寺域全体が史跡に指定されている（『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』（2009））。



写真：普明寺とその寺域

（出典：『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』）

ウ 記念物：植物

<岩屋観音イロハモミジ>

能古見にある岩屋山興法寺^{いわやさんこうほうじ}（岩屋観音）の境内には、高さ20.5m、幹回り3.3m、枝張り21.5mのイロハモミジの巨木がある。樹齢は350年と推定され、佐賀県の指定する「佐賀県の名木・古木」の中でも2番目に古い。「さが名木100選」にも選定されている（『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』（2009））。



写真：岩屋観音イロハモミジ

（出典：『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』）

4) 22世紀に残す佐賀県遺産

ア 光武酒造場

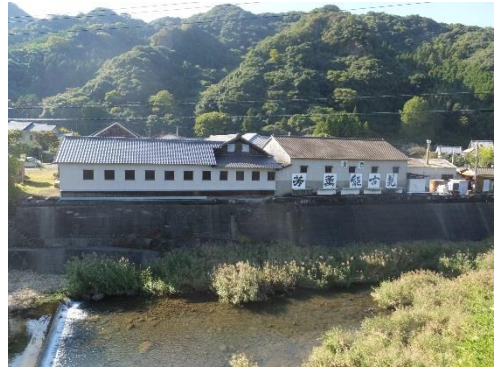
浜町の酒蔵通りに面して位置する酒蔵である。創業は江戸時代に遡ると伝わる。明治14年（1881）建築の主屋は現在、入母屋造妻入りであるが、痕跡から以前は切妻造であったことが分かる（『佐賀県遺産ガイドブック』（2018））。



写真：光武酒造場

イ 馬場酒造場

経ヶ岳を源流とする中川のほとりに位置する、市内の山手にある酒蔵である。寛政7年（1795）創業で、明治初期以前に建てられたと推定される第一蔵は、木造二階建て、外壁は上部白漆喰塗り、腰壁は板張りで、入母屋形式の大屋根を二重梁を使用した小屋組みが支えている（『佐賀県遺産ガイドブック』（2018））。



写真：馬場酒造場

ウ 中島酒造場

登録文化財（P.45）にて記載。

エ 矢野酒造場

登録文化財（P.44）にて記載。

5) 主な未指定文化財

ア 有形文化財

<鹿島城址（かしまじょうし松蔭神社及びまつかげじんじゃ旭ヶ岡公園一帯）>

松蔭神社は鹿島の城内にあり、鹿島藩の歴代藩主を祀っている。寛永10年（1633）に初代藩主鍋島忠茂が北鹿島の常広城内に祀られたのが始まりとされ、城が高津原の鹿島城へ移転した後、文化6年（1809）に現在の地に移っている。

旭ヶ岡公園は文久2年（1862）、13代藩主直彬が松蔭神社の境内の一画に多くの桜を植えて、「衆楽園」と名付けて人々に開放し、毎年かんおう観桜の宴をひらいたことを起こりとしている。大正10年（1921）に、神社の北東部を整理して広場とし、桜も増植して、現在の「旭ヶ岡」と名付けた。



写真：旭ヶ岡公園

（出典：『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』）

＜鹿島藩が建設した農業用水路 （鹿城川、花木庭水道、嶽水道）＞

鹿城川は3代藩主鍋島直朝の政策によって、寛文年間（1661～1673）に高津原台地の上に造られた水路である。幅約1.5m、全長約3.5kmにも及ぶ。

このほかにも花木庭水道や嶽水道、その他の多くの堤なども建設されており、現在も市内の農地を潤し続けている。

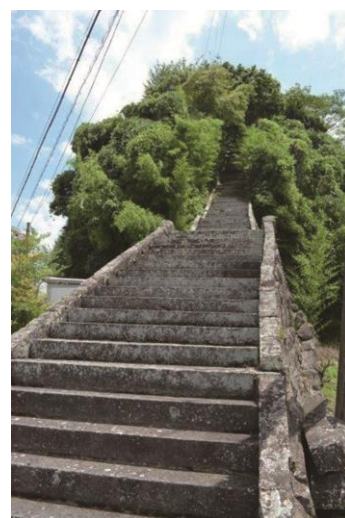


写真：鹿城川（出典：『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』）

＜事比羅神社（臥竜城跡）＞

浜町に位置し、「城の上の金比羅さん」と呼ばれている。境内の中央にある事比羅神社の社殿は昭和60年（1985）に再建されたものであるが、当初は香川の^{こんびらだいごんげん}金比羅大権現を祀って建てられたもので、舟津の船乗りなどから信仰されていた。当時は石段の下から参拝が直接できるよう、船着場があったと伝えられている（『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』（2009））。

境内一帯は鎌倉時代中期に原長門守貞光が築いた^{はらながとのかみさだみつ}臥竜城である。城は度々の合戦の末に焼失している。



写真：事比羅神社へ続く石段

＜^{たいちじ}泰智寺＞

臥竜城の傍らに位置する泰智寺は、普明寺と同じく鹿島鍋島藩の菩提寺である。元和8年（1622）に初代藩主忠茂が当初この地にあった^{ちおんじ}知恩寺を浜町の八宿に移転し、北鹿島の常広から深立寺を移転したもので、後に2代藩主正茂が泰智寺と改名した。

慶安3年（1650）に起きた大火で寺の建物はことごとく焼失した。その後、再建を図るも財政難や暴風雨などの影響で遅れ、現在の山門は寛政10年（1798）の再建である（『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』（2009））。



写真：泰智寺

（出典：『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』）

<肥前鹿島駅>

肥前鹿島駅は肥前竜王駅と肥前浜駅の間に位置し、JR 長崎本線の開通に伴って、昭和5年（1930）に建築された駅である。駅舎の一部は建築当時のまま残っている。



写真：肥前鹿島駅

<肥前浜駅>

肥前浜駅は肥前鹿島駅と肥前七浦駅の間に位置し、JR 長崎本線の開通に伴って、昭和5年（1930）に建設された。木造の駅舎を持ち、平成30年（2018）3月に、古写真等をもとに往時の姿へ修理修景工事が行われた。



写真：肥前浜駅

<肥前七浦駅>

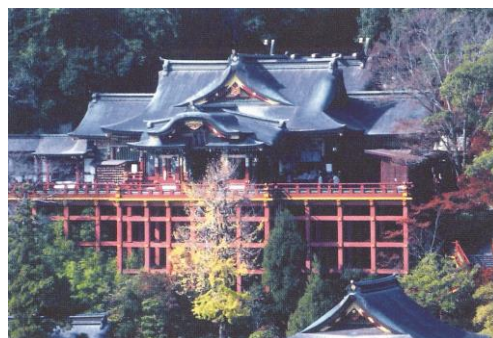
肥前七浦駅は肥前浜駅と肥前飯田駅の間に位置し、昭和8年（1933）に建築され、木造の駅舎を持つ。昭和50年代に無人化されており、外装、内装、調度品ともに当時を偲ばせる状態で残っている。



写真：肥前七浦駅

<祐徳稲荷神社>

祐徳稲荷神社は貞享4年（1687）、鹿島藩3代藩主直朝夫人によって創建された。昭和24年（1949）、火災によって焼失したが、昭和32年（1957）に本殿が再建、昭和41年（1966）に神楽殿が竣工しており、その後も10年毎に整備拡充が行われている。



写真：祐徳稲荷神社

（出典：『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』）

<草葺の民家>

本市には重伝建地区である浜庄津町浜金屋町をはじめとして、多数の草葺民家（屋根葺き材料として、茅だけでなく葦も多く使用されているため、「草葺」としている。）が残っている。

市内に残る草葺民家は、山手だけでなく、市街地にも点在している。



写真：市街地にある草葺の民家

イ 民俗文化財

<沖の島まいり>

七浦海岸から約5kmの有明海上に沖の島(通称:おしまさん)と呼ばれる、干潮時のみに現れる島がある。この島に御髪大明神おんかみだいみょうじんという祭神が祭られており、水神、特に雨乞い、航海や海の鎮守の神として農民や漁民に信仰されてきた。

沖の島まいりは雨乞いや豊作祈願のために沖ノ島へ浮立を奉納したことや、五の宮神社みこのしとぎよの神輿が渡御した記録があることから、少なくとも江戸時代前期から信仰が浸透していたと考えられることが『鹿島藩日記』などの「鹿島鍋島家史料」(江戸時代)の記述から確認できる。

現在は旧暦の6月19日の夕方から20日の朝にかけて実施されている。有明海沿岸の各地から旗や幟のぼり、提灯で飾られた多くの船が沖ノ島に集まり、船上で浮立が行われる。

<面浮立>

市内には指定等文化財となっているものの他に、野畠のぼこ、山浦、行成、上古枝、小宮道、大宮田尾こみやどう おおみやた、西塩屋お、東塩屋ひがしおや、飯田、龍宿浦においても面浮立が継承されている。

起源については、諸説あるが、『音成の面浮立』(1979)によると、170年前(江戸時代)に諫早地方から飯田に伝承したものが市内に波及したとされている。

面浮立は鬼面と華やかな衣装を付け、笛かね、鉦、太鼓の囃子に合わせて、勇壮に躍動するもので、衣装や所作などに各地区の特徴が表れている。

天子神社、鎮守神社、戸口神社、山浦天満宮など多くの神社で奉納されている。



写真：沖の島まいり

(出典：『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』)



写真：野畠の面浮立

(6) 特産品・工芸品・菓子・料理等

1) 日本酒

江戸時代、酒は藩の専売品であった。明暦3年(1657)に酒株制度を設け、株札を持っているものに対してのみ、酒を造らせた(『肥前国藤津郡濱宿界隈の歴史』(2013))。第4代鹿島藩主直條が著した『鹿島志』(1685)には「鹿島市陌には醸造家多し。就中、下田氏の種族(下田弥兵衛の家か)その名を得たり。頃間始めてみぞれざけ霽酒を製し、又、にんどうしゆ いちござけ忍冬酒・覆盆酒を醸す。」とあり、この頃には、本市では酒造りが行われていたと分かる。

現在も、本市内には多くの酒蔵を有しており、多良岳の伏流水と佐賀平野の最南端の米が生み出す芳醇な香りと深い味わいの酒づくりが受け継がれている。



写真：日本酒

2) 練り製品

有明海で獲れる魚を加工して、蒲鉾などの練り物の生産が浜町を中心に盛んに行われた。昭和35年(1960)頃に発行されたパンフレット『跳躍する鹿島市/産業と観光』には、「鹿島のかまぼこ」は約200年前の創業であることが記されている。

現在営業中の蒲鉾屋は2～3軒と減少したが、このうちの1軒は昭和12年(1937)創業で、伝統の味を引き継いで、製造、販売を行っている。



写真：練り製品

3) ふなんこぐい

ふな 鮎の昆布巻きと大根、ごぼう、レンコンなどに水あめを加えて、すめ(調味したこしみそ)で長時間煮詰めてつくる郷土料理。1月20日の二十日正月に座敷の床の間に恵比寿・大黒を飾り、ふなんこぐいを供え、福寿を祈る慣習がある。前日19日には浜町の肥前浜宿酒蔵通りにふな市がたち、そこで鮎を調達する。



写真：ふなんこぐい

4) 鹿島錦

金や銀の箔紙に色鮮やかな絹糸を織り込んだ手織物である。

『藤津郡人物小志』(1931)によれば、鹿島藩第9代藩主夫人篤子が病床にあった折、天井の網代文様を見て思いついたとされ、紙縀りを組んで、印籠などを作ったのが始まりとされている。その後、歴代藩主の夫人によって継承、改良され、発展していく。

明治43年(1910)の日英大博覧会への出品や昭和43年(1968)の鹿島錦保存会の設立などを通して、普及、発展が続いている。



写真：鹿島錦紗綾形文 簞笥

(出典：『鹿島市の文化財～ふるさと歴史探訪～』)

5) 稲荷ようかん

祐徳稲荷神社の名物で、紙の筒に入った^{ようかん}羊羹を下から押し出し、糸で好きな大きさに切って食べる。別名糸切りようかんとも呼ばれる。

稲荷ようかんは、昭和7年(1932)の製造開始以来、添加物、保存料を使わず、国産の原料のみを用いて、製造されており、市内の主要な観光地で販売されている。



写真：稲荷ようかん

6) 祐徳せんべい

祐徳神社の門前商店街にある、大正元年(1912)創業の「井手商店」で生産、販売が行われている。代表的

な商品である「しょうがせんべい」は、風味を損なわないよう、丁寧に手作業ですりおろした生姜が用いられており、祐徳稲荷神社のお茶菓子としても愛用されている。



写真：祐徳せんべい

7) ^{まえうみ}前海もん (有明海特有の水産物)

広大な干潟と最大6mの干満の差を有する有明海にはムツゴロウ、ワラスボ、クチゾコ、アカガイなど独特な生物が生息している。地元ではこれらを蒲焼や煮物、揚げ物などに調理する郷土料理が根付いている。また、有明海に生息するカニ(シオマネキ)を丸ごとすりつぶした「ガニ漬」は酒の肴^{さかな}として親しまれている。



写真：ムツゴロウ蒲焼

8) 海苔

多数の河川からミネラルの豊富な水が流れ込む有明海において、最大6mにもなる干満の差を利用して作られる佐賀海苔は全国有数の生産量と販売量を誇る。

本市は昭和29年(1954)に県内で初めて天然採苗のやし網による海苔養殖が行われた。昭和30年代からは糸状体培養人工採苗に成功し、その後生産が加速した。



写真：海苔

9) のごみ人形

昭和20年(1945)、終戦直後の物不足の中、生活に潤いを求めて作られた郷土玩具である。風物や干支などをモチーフに作られる土鈴で、魔除けや開運の人形として親しまれている。

現在は人間国宝の鈴田滋人氏が人形のデザインをし、原型をつくっており、計3人の体制で制作している。



写真：のごみ人形

10) あさうらしんぱちがさ 浅浦甚八笠

浅浦地区に約300年前から伝わるとされる竹の皮で作ったかぶり笠である。竹を割って無駄のないよう骨組みが作られている。雨用と日除け用があり、農作業用や魚釣用として愛用され、地元の浅浦甚八笠保存会によって継承が図られている。



写真：浅浦甚八笠

11) ゆずこしょう

九州北部の地域に見られる、柚子と唐辛子を用いた薬味である。刺身や汁物を食す際に、わさびや唐辛子のような形で用いられる。

家庭でも作られており、本市では特に祐徳稲荷神社の門前商店街で多く見られ、作り手により味や辛さに特徴が出る。



写真：ゆずこしょう

<コラム> 鹿島錦と佐賀錦

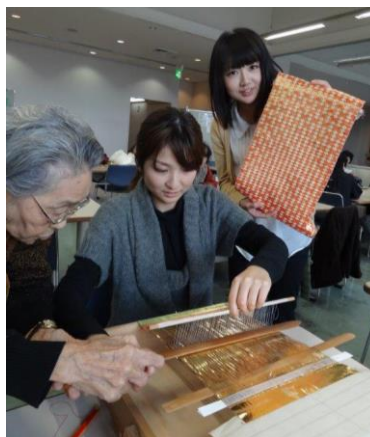
鹿島錦の発祥は、p.55 でも記載のように、鹿島藩第9代藩主鍋島直彥夫人篤子が病で寝床にあったとき、部屋の天井に組まれた網代文様をヒントに日用品に活かすことを考え、周囲の人に相談して考案したことが始まりと考えられている。その後、歴代の藩主夫人らによりさまざまな工夫が加えられ、金銀の泊紙を細かく截って経糸とし、色染めした絹糸を緯糸として織り込み、模様にも工夫が重ねられ、工芸品として完成された。

鹿島錦は明治43年（1910）にロンドンで日英大博覧会が開催されたとき、作られている地域が分かりやすいように「佐賀錦」という名前で出品され、多くの人々の注目を集めた。

鹿島錦の製作技法は、保存会や趣味で製作している愛好者の方々の手で、今も受け継がれている。



写真：鹿島錦の作品



写真：鹿島錦体験